

大里村文化財調査報告書 第2集

埼玉県大里郡大里村

円山古墳群

1998

大里村教育委員会

序

まるやま
円山古墳群が位置する箕輪、青山地区の台地は、村内でも数多くの遺跡が所在する地域でもあります。これらの遺跡は、私たちの祖先の生活や文化の変遷を知るかけがえのない文化遺産であり、それを後世に伝えることは私たちの責務でもあります。しかし、私たちの生活をより豊かにするために、土地開発が行われ、それに伴い先人たちの残した文化的遺産、とりわけ埋蔵文化財については消滅する場合が必ずといってよいほど生じます。そこで、やむを得ず発掘調査を実施し、記録として保存する措置をとらざるおえません。

このたびの円山古墳群の調査は、山砂利採取を目的とした開発行為に伴う発掘調査であり、3基の古墳を調査した結果、多数の円筒埴輪とともに、形象埴輪の一つである靴形埴輪や鬚形埴輪、それに人物埴輪など古墳祭祀を知る貴重な資料を得ることができました。

本書はこれらの成果をまとめたもので、調査結果が学術研究の基礎資料として、また、教育機関の参考資料として広く御活用いただけることを願ってやみません。

最後になりましたが、刊行にあたり発掘調査に関する調整に御尽力していただきました埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行にいたるまで多大な御協力を賜りました埼玉県立歴史資料館、有限会社金子建材、並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成10年3月

大里村教育委員会
教育長 金 井 岩 夫

例 言

- 1 「^{まるやま}円山古墳群」は、1975年に、埼玉県立歴史資料館が大里村教育委員会の委託を受けて行った、大里村円山古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、県立歴史資料館で協議の結果、金井塚（当時専門調査員兼調査研究部長）と梅沢太久夫（学芸員）が担当者となり、小野義信（学芸員）と歴史資料館の作業員を中心にして、地元有志の協力を受けて実施した。
- 3 発掘調査後の遺物と図版の整理は、小野義信と千代田恭子、田中照子、辻沢貴美江、荒井教子が県立歴史資料館で行った。
- 4 報告書は、小野義信がまとめた略報をもとにして、金井塚が執筆したが、埴輪の考察は若松良一氏（県立さきたま資料館学芸員）に依頼した。なお、付編として掲載した若松氏の論文「終末期円筒埴輪の一樣相」は、円山古墳群の円筒埴輪の編年的位置付けをさらに明瞭にするために、特に寄稿をお願いしたものである。主体部が全く破壊されていた円山古墳群の性格が、これに依って多少とも明らかにされれば幸甚と考えている。
- 5 本報告書の刊行については、大里村教育長金井岩夫氏、大里村文化財保護委員長根岸喜夫氏、及び大里村教育委員会主事出縄康行氏から格段のご助力をいただいた。心から感謝申しあげる次第である。
- 6 本報告書は、1983年（昭和58年）にはまとめられていた。その後刊行が遅延して、結局、発掘調査後23年間経過してようやく公刊されることになったが、遅延の責任は発掘を担当した金井塚が負うべきものである。さらに、編集、校正においても事務局の出縄により発行が遅れる結果となってしまった。大里村教育委員会はじめ関係者各位に、深くお詫び申しあげる。
- 7 なお、本報告書にかかわる図版と出土遺物は、現在、大里村教育委員会に収蔵・保管されている。

（金井塚良一）

目次

序	金井岩夫
例言	
挿図目次	
図版目次	
I 発掘調査に至った事情と経過	1
1 発掘調査に至った事情	1
2 発掘調査の経過 —発掘日誌抄—	1
II 円山古墳群の立地と周辺の古墳群	4
1 古墳群の位置	4
2 周辺の古墳群	5
III 発掘調査の概要	9
1 古墳群の現状	9
2 1号墳の発掘	9
1) 墳丘・2) 周堀・3) 主体部・4) 遺物の出土	9
3 2号墳の発掘	12
1) 墳丘・2) 周堀・3) 主体部・4) 遺物の出土	12
4 3号墳の発掘	17
1) 墳丘・2) 周堀・3) 主体部・4) 遺物の出土	17
IV 考察	19
1 円筒埴輪	19
1) 1号墳・2) 2号墳・3) 3号墳	21
2 形象埴輪	34
1) 1号墳・2) 2号墳・3) 3号墳	34
3 須恵器	45
1) 1号墳・2) 2号墳・3) 3号墳	45
4 その他の遺物	49
5 主体部	49
付編 終末期円筒埴輪の一様相	
—後期円筒埴輪の編年から— 若松 良一	50

挿 図 目 次

第1図	円山古墳群の位置と周辺の古墳分布図	4
第2図	円山古墳群全測量図 1/600	9
第3図	円山1号墳 墳丘とトレンチ配置図 1/300	10
第4図	円山1号墳 墳丘及び周堀覆土断面図 1/80	11
第5図	円山2号墳 墳丘とトレンチ配置図 1/300	13
第6図	円山2・3号墳墳丘及び周堀覆土断面図 1/40	14
第7図	円山2号墳 主体部実測図 1/40	15
第8図	円山3号墳 墳丘とトレンチ配置図	17
第9図	円山3号墳出土 円筒埴輪実測図(1)	19
第10図	円山3号墳出土 円筒埴輪実測図(2)	20
第11図	円山3号墳出土 円筒埴輪拓影図(1)	22
第12図	円山3号墳出土 円筒埴輪拓影図(2)	23
第13図	円山3号墳出土 円筒埴輪拓影図(3)	24
第14図	円山3号墳出土 円筒埴輪拓影図(4)	25
第15図	円山3号墳出土 円筒埴輪拓影図(5)	26
第16図	円山2号墳出土 円筒埴輪実測図	28
第17図	円山2号墳出土 円筒埴輪拓影図(1)	29
第18図	円山2号墳出土 円筒埴輪拓影図(2)	30
第19図	円山2号墳出土 円筒埴輪拓影図(3)	31
第20図	円山2号墳出土 円筒埴輪拓影図(4)	32
第21図	円山2号墳出土 円筒埴輪拓影図(5)	33
第22図	円山2号墳出土 円筒埴輪拓影図(6)	34
第23図	円山1号墳出土 円筒埴輪拓影図	35
第24図	円山2号墳出土 帽子形埴輪実測図	36
第25図	円山2号墳出土 靴形埴輪実測図(1)	37
第26図	円山2号墳出土 靴形埴輪実測図(2)	38
第27図	円山2号墳出土 翳形埴輪実測図(1)	39
第28図	円山2号墳出土 翳形埴輪実測図(2)	40
第29図	円山2号墳出土 形象埴輪実測図	42
第30図	円山3号墳出土 形象埴輪実測図	44
第31図	円山古墳群出土 須恵器実測図	46
第32図	円山古墳群出土 鉄器実測図	47
第33図	円山2号墳出土 耳環実測図	48

図 版 目 次

図版 1	円山古墳群から荒川を望む 古墳群全景	図版 8	2号墳埴輪出土状態 2号墳埴輪出土状態
図版 2	1号墳墳丘 1号墳墳丘全景		2号墳石室遺物出土状態 2号墳石室遺物出土状態
図版 3	1号墳周堀 1号墳周堀	図版 9	2号墳遺物出土状態
図版 4	2号墳墳丘全景 2号墳周堀	図版10	3号墳墳丘 3号墳墳丘全景
図版 5	2号墳石室近景 2号墳石室全景	図版11	3号墳周堀 2号墳・3号墳周堀
図版 6	2号墳石室玄室入口部 2号墳礫床面	図版12	3号墳周堀 3号墳周堀 3号墳遺物出土状態
図版 7	2号墳周堀 2号墳周堀	図版13	2号墳出土遺物
		図版14	2・3号墳出土遺物
		図版15	2・3号墳出土遺物

表 目 次

第1表	三千塚古墳群の規模一覧表
第2表	鉄器観察表

I 発掘調査に至った事情と経過

1. 発掘調査に至った事情と経過

1975年（昭和50）9月15日、大里村教育長小池敬介氏が、文化財保護委員長根岸喜夫氏と共に県立歴史資料館を訪れて、大里村箕輪の山林中に所在する三基の古墳の発掘調査について協力を要請してきた。箕輪地域で、現在山砂利採取を目的にした大規模な土取りが行われ、予定地内にある三基の古墳が壊滅寸前になっている。これを放置するわけにはいかないが、大里村では発掘調査がまったく不可能なので、歴史資料館でなんとか協力してもらえないかということであった。

当時、大里村には、文化財行政にたずさわる専門の職員は配置されていなかった。遺跡の破壊例もほとんどなくて、行政で行う発掘調査の経験は皆無だったのである。それだけに、古墳群の破壊を目前にして、その対策に苦慮されたのだろう。発掘調査の協力を訴える小池教育長の要請はまことに真剣だった。

県立歴史資料館は、この年—1975年にオープンして、まだオープン後の諸施設の整備に多忙を究めていた。しかも本館に引き続いて展示棟建設の準備も始まっていて、発掘調査に学芸員を割り当てる余裕はまったくなかったが、破壊を苦慮する小池教育長の立場と危機に瀕した古墳群の現状は十分理解できた。歴史資料館としても早急に現地調査を行い、館内部でも十分検討して、出来るだけ協力できるよう考えてみたいと返答して、この日の対応は終わったが、こののち、大里村の依頼の内容を県の文化財保護課に連絡し、取り敢えず近日中に現地を調査して、大里村と協議しながら、善後策を検討することを伝えておいた。

9月17日、金井塚と梅沢太久夫は大里村に出張して、小池教育長・根岸喜夫氏と共に古墳群の現況を調査した。山砂利採取業者—金子建材の関係者も現地に待機していて、合同で、採取計画や作業の進行状況を検討したが、山砂利の採取は予想以上に大規模だった。しかも、採取はすでに三基の古墳の墳裾近くまで及んでいて、このまま作業が進行すれば、古墳は、間違いなく、数日のうちに削平されると想定されたのである。

そこで、取り敢えず採取業者に、土取り作業の一時中止を要請し、その後、大里村と業者の話し合いを、県の文化財保護課の指導を得て早急を実施するよう求めたが、採取業者—金子建材は、この処置に極めて従順だった。話し合いが成立するまで、採取作業をこれ以上進めないことも約束した。

数日後、県文化財保護課・大里村・山砂利採取業者の三者の話し合いが文化財保護課で行われ、今回の発掘調査が決定されたのである。

2. 発掘調査の経過 —発掘日誌抄—

残存する三基の古墳は、いずれも墳丘を著しく破壊され、墳頂部には盗掘坑が認められた。一見

して、すでに主体部の攪乱が予想されたが、取り敢えず三基の古墳を北側から1号墳、2号墳、3号墳と呼称し、3号墳から発掘調査を実施した。

発掘調査は、1975年11月18日に開始して、翌年2月22日に終了したが、その間、県立歴史資料館の事業と重複して中断する期間があった。発掘調査の経過は以下（発掘日誌抄）のとおりである。

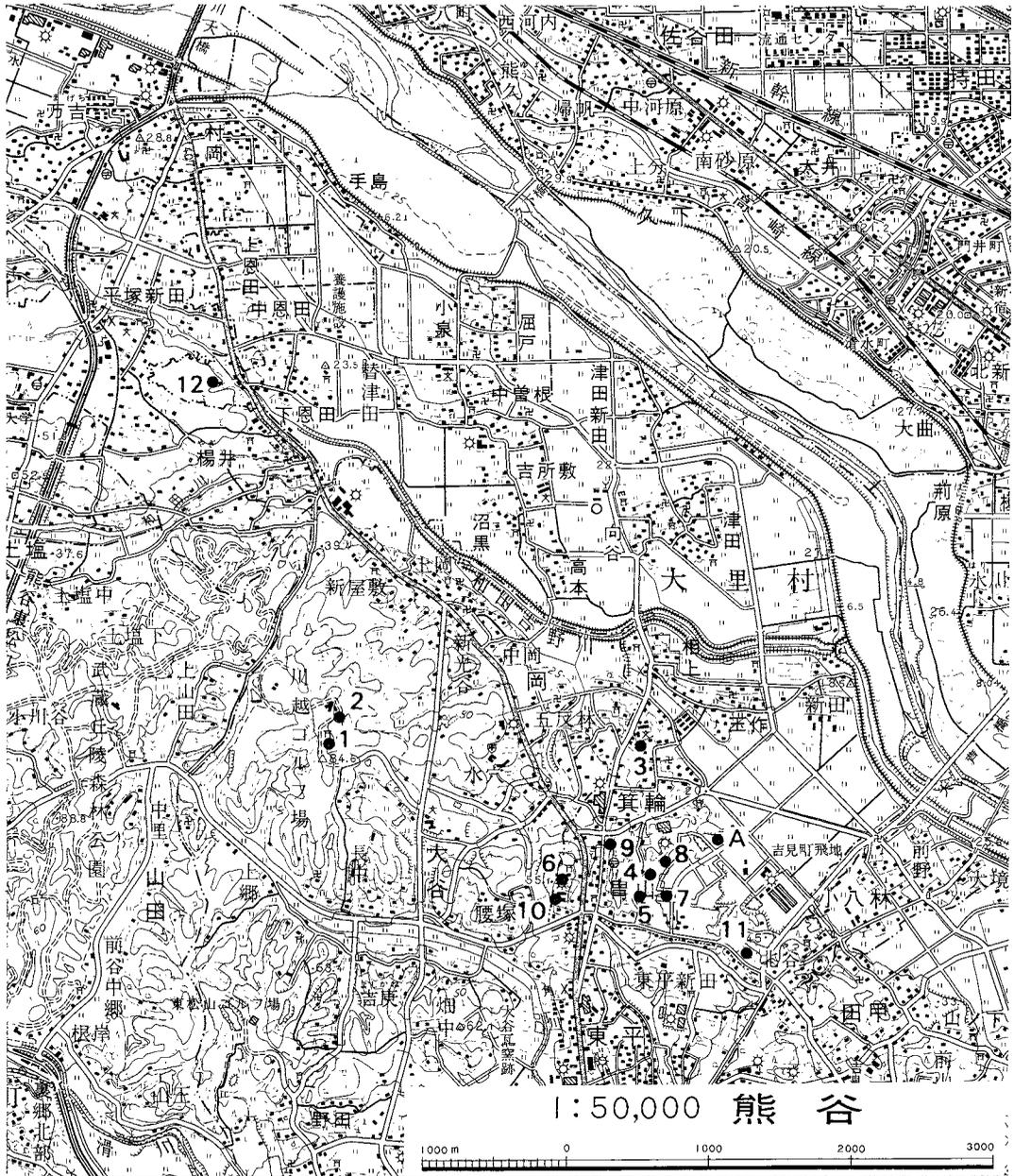
- 11月18日（晴） 9時30分から、2号墳墳丘上で鍬入れ式を挙行。その後、3号墳墳丘の実測を実施し、平行して2号墳墳丘の実測も行う。3号墳の周堀から発掘作業を開始する。
- 11月19日（雨） 作業中止
- 11月20日（晴） 3号墳の周堀確認作業を続ける。周堀の南部分でブリッチの存在を確認する。
- 11月21日（曇） 3号墳の周堀確認作業を続行。
- 11月22日（雨） 作業中止
- 11月23日（曇） 3号墳の周堀確認作業と並行して、主体部確認作業を開始する。北東部分の周堀からほぼ完形の須恵器（提瓶）が出土した。
- 11月24日（晴） 3号墳の確認作業と主体部確認作業を続ける。又、2号墳の墳丘の実測を始める。ここでは、主体部がすでに大きく破壊されていることが確認された。
- 11月25日（晴） 3号墳の周堀の精査を行う。
- 11月26日（晴） 3号墳の精査を続ける。2号墳の発掘作業を開始する。
- 11月27日（曇） 2号墳の周堀確認作業を続ける。周堀の南部分から須恵器（長頸壺）が出土した。
- 11月28日（曇） 2号墳の周堀確認作業を続ける。周堀の北東部分で人物埴輪（女子）頭部が出土した。
- 11月29日（晴） 2号墳の周堀確認作業を続ける。周堀の北西部分で土師器（埴）が出土した。
- 11月30日（晴） 2号墳の周堀確認作業を続ける。
- 12月1日（晴） 2号墳の周堀確認作業と並行して、主体部確認作業を開始する。周堀の南東部分で、形象埴輪（帽子・鬘・鞞形）の破片が多数出土した。
- 12月2日（晴） 2号墳の周堀確認作業と主体部確認作業を続ける。
- 12月3日（晴） 3号墳の全体の精査と写真撮影を行う。2号墳の周堀の精査と主体部確認作業を続ける。3号墳の周堀の西部分で、テラス状遺構の存在を確認する。円山古墳群全体の測量を行う。
- 12月4日（晴） 2号墳の周堀の精査を続け、写真撮影を行う。並行して、主体部礫床の調査を行い、礫床直上で奥壁際に当たる部分から刀子・鉄鏃が出土した。
- 12月5日（雨） 2号墳主体部の精査を続ける。
- 12月10日（曇） 2号墳の主体部の実測を行い、併せて写真撮影に入る。
- 12月11日（曇） 2号墳の主体部の実測を続行。
- 12月15日（晴） 2号墳の墳丘の東西土層断面図を作成し、写真撮影を行う。
- 2月12日（晴） 1号墳の発掘作業を開始する。
- 2月13日（晴） 1号墳の周堀確認作業を続ける。周堀の西部分で、周堀が消失しているのを確認

する。1号墳の墳丘の実測を行う。

- 2月14日（晴） 1号墳の周堀確認作業を続ける。周堀の南西部分の外壁に直行する幅2.5mの溝を確認する。
- 2月16日（曇） 1号墳の周堀確認作業と並行して、主体部確認作業を開始する。
- 2月17日（曇） 1号墳の周堀確認作業と主体部確認作業を続ける。周堀の南西部分でブリッチの存在を確認する。
- 2月18日（雨） 作業中止
- 2月19日（曇） 1号墳の周堀確認作業と主体部確認作業を続ける。
- 2月20日（曇） 1号墳の周堀確認作業と主体部確認作業を続ける。合わせて周堀に直交する溝の確認作業を行う。主体部が破壊されていることを確認する。
- 2月21日（晴） 1号墳の精査と写真撮影を行う。
- 2月22日（晴） 1号墳の墳丘の写真撮影を行う。本日で円山古墳群の調査を終了する。

Ⅱ 円山古墳群の立地と周辺の古墳群

1. 古墳群の立地



- A. 円山古墳群 1. 雷電山古墳 2. 三千塚古墳群 3. とうかん山古墳 4. 楓山古墳
 5. 東山古墳 6. 甲山古墳 7. 東山古墳群 8. 楓山古墳群 9. 賢木丘古墳群
 10. 甲山古墳群 11. 大境古墳群 12. 瀬戸山古墳群

第1図 円山古墳群の位置と周辺の古墳分布図

大里村は、埼玉県のほぼ中央に位置している。南北約8 km、東西約2～3 kmの狭長な形状を呈しているが、地形的には、荒川の沖積地帯に発達した低地面と、北部比企丘陵に接続する台地面（西南部）に明瞭に区分される。円山古墳群は、この台地面に築成された小規模な古墳群である。

円山古墳群が立地する大字箕輪地内は、北部比企丘陵が広大な荒川の沖積面に次第に緩傾斜する洪積台地面に立地しているが、地域内には浸食谷が複雑に入り込んで、相互に隔絶されたいくつかの小支丘が形成されている。円山古墳群はこれらの小支丘の一つ、小字船木地内の台地北縁に分布していたのである。

2. 周辺の古墳群

円山古墳群の周辺には多数の古墳群が存在している。今までに確認された古墳群だけでも三千塚古墳群・愛宕古墳群・吉庚古墳群（東松山市）、月輪古墳群・寺ノ台古墳群（滑川町）、田甲古墳群（吉見町）、甲山古墳群（大里村）などがあげられるが、ここでは円山古墳群と直接関係のある周辺のいくつかの古墳について、その概要を紹介しておこう。

三千塚古墳群（第1図2） 東松山市大谷の山稜上に所在する。主墳雷電山古墳(1)を中心にして、総数約200基以上の古墳が、八つの支群に別れて築成されていたと考えられている。1961年には、ゴルフ場造成に伴って、第1支群を除く古墳群のほぼ全域で、小古墳が発掘調査された。発掘調査の概要は第1表のとおりである。

とうかん山古墳（第1図3） 大里村箕輪の台地上に築造された前方後円墳である。全長74 m、後円部の高さ5 m、前方部の高さ約4 m、ほぼ双子塚の形状を呈している。東側が一部削平されているが、全体として良好に保存されている。この古墳は、今までに発掘されたことがなかったし、盗掘によって遺物が出土した伝承もない。したがって、築造時期を推定する手掛りはいまのところ皆無であるが、墳丘の形状とまた封土から採集された円筒埴輪や少量の土師器の断片などによって、6世紀中葉前後には出現したと考えられている。昭和62年に県の文化財に指定された。

楓山古墳（第1図4） 『埼玉県史』に「銅鏡・石製鏡・勾玉・石小刀・鈴環・須恵壺・土製鈴・埴輪馬」などを出土した古墳と記載されている。しばらく該当する古墳が不明であったが、最近大字箕輪小字楓山地内に所在した前方後円墳と判明した。現在楓山地内の桑畑の中に墳丘の一部が残存しているが、大半は開墾によって削平され、原状を推定することは不可能であった。根岸喜夫氏は、楓山古墳を冑山古墳に匹敵する大古墳と考え、原島禮二氏は、「全長100 mに近い古墳であった可能性もある」と推測しているが、⁽²⁾ 確実な規模は今後の調査によって明らかにされなければならない。伝承された出土遺物によって、この古墳は、6世紀前半には築成されたと考えてほぼ間違いないだろう。

東山古墳（第1図5） この古墳も、根岸喜夫氏の御教示によって追跡できた前方後円墳である。今は消滅して、原状をまったくとどめていないが、同氏の記憶によれば、東山古墳が立地した場所は、かつて同氏の所有地であった。

根岸氏の四代前にあたる根岸友山の時代（江戸時代末期）に削平したが、主体部の形状は伝承されていないという。遺物は土器、鉄片などが出土したといわれているが、現物はすでに散逸している。古墳があった場所は、青山地区にとくに発達した小丘上の平坦部である。現在でも古墳址と想定される土盛りの跡が残っていて、ここになんか大きな古墳が築造されていたことが容易に推定された。周辺には埴輪片や、土師器の細片も散布している。

東山古墳に隣接する畑を所有して、長くそこを耕作していた新井丑松氏や飯島弘氏が伝える伝承によれば、両氏の子供のころまで、ここには大きな塚が残っていたそうである。すでに削平がすすんで、前方後円墳の形状は呈していなかったが、塚の上には樹木が茂り、キツネが生息していたのを覚えているという。この塚の上に青山神社が建立されていたが、江戸時代末ごろに、甲山古墳の墳頂上に移された。『埼玉県史』に紹介された甲山古墳の出土遺物は、その際、墳丘の一部が削られて出土したものであろう。

なお、飯島氏によれば、東山古墳の周辺は昭和初期ごろ開墾され、開墾によって埴輪（大部分が円筒埴輪のようであったが、若干の形象埴輪があったらしい）が多く出土した。飯島氏の記憶によれば、ほとんど東山古墳の範囲内から出土したようであった。これらの埴輪は、現在所在が全く不明で実見するわけにはいかなかったが、同氏の記録は十分信頼してよいだろう。東山古墳を、墳丘に埴輪を樹立した前方後円墳と想定して、おそらく間違いなさそうである。

甲山古墳（第1図6） 旧大里吉見中学校の北側に所在する、大型の古墳である。現状は、全長90m、高さ11.25m、二段築成の円墳であるが、確実に円墳と断定できる根拠は今のところ確認されていない。昭和53年（1978）に、東松山市史編纂室がおこなった墳丘測量の結果では、墳裾の東側に張り出した箇所が認められたが、この部分は、墳頂に建立された青山神社の参道として、江戸時代（天保年間）にすでに削平されていた。現状の張り出しが、この古墳の前方部の名残だったのか、あるいは、墳丘の参道として削られたものだったのか、残念ながらはっきりしなかった。この張り出しを根拠にして、原島禮二氏は、甲山古墳を帆立貝式の前方向後円墳と推定しているが、周堀が未発掘で、しかも張り出し部分の性格がはっきりしないこの古墳は、現状では前方後円墳⁽³⁾と断定することは無理だろう。

『新編武蔵風土記稿』や『埼玉県史』によれば、甲山古墳から埴輪・須恵器・玉類・鏡・大刀などが出土している。出土品は、現在散逸して残されていないが、伝承された出土遺物の内容を参考にすれば、6世紀前半には築造されたと考えてよさそうである。墳丘には、埴輪施設が認められている。昭和63年に、県の文化財に指定された。

東山古墳群（第1図7） 東山古墳や大塚古墳が築造された東山・大塚地内には、二つの前方後円墳のほかに、多数の円墳が存在していたようである。そのすべては現在削平されて、古墳群の実態は不明であるが、東山古墳以後、この地域に、7世紀まで連続して古墳が造営されたと考えていいだろう。

大塚地内では、平成元年（1989）の発掘調査によって、大塚古墳の東方から古墳跡が二基確認された。

東山地内では、東山古墳のほかに古墳の所在は不明であるが（この地域は、区画整理事業の対象

外で、発掘調査が実施されていない)、二、三の古墳が削平された伝承がある。大塚地内より、平らな場所が広がるこの東山の台地上に、東山古墳を囲んで、いくつかの古墳が築造された可能性は十分考えていいだろう。

東山地内と大塚地内に分布が想定された二つの古墳群は、東山古墳や大塚1号墳を主墳にした、本来同一の古墳群と考えていいだろう。二つの古墳群は、一括して東山古墳群として把握することにした。

楓山古墳群 (第1図8) 楓山古墳の周辺にも、小円墳が存在した伝承がある。今はそのすべてが湮滅して、所在は不明になっている。遺物ものこされていない。

賢木丘古墳群 (第1図9) 青山の、台地の北端に築成された古墳群である。

最近まで数基の小円墳が残存していたが、昭和48年(1973)に、道路拡張によって三基の古墳が破壊され、現存する古墳は二基となった(いずれも大破して、わずかに墳丘の一部をとどめているだけである)。

道路拡張工事のとき、破壊された三基の古墳から埴輪の断片が多く出土したようであるが、現在、残存している破片はまったくなく、埴輪の詳細は不明であった。

なお、『東京人類学雑誌』207号(明治36年)には、北谷出土の人物埴輪が報告されているが、北谷は通称で、賢木丘西地区が該当する。おそらくこの地内にあった古墳群のどれかから出土したのだろう。賢木丘古墳群は、大里村内では珍しく、塗彩した人物埴輪を樹立していた古墳群だったのである。

甲山古墳群 (第1図10) ⁽⁴⁾ 青山古墳の周辺には、昭和22年(1947)ごろまでに数基の古墳が残存していたが、昭和22年に甲山古墳に隣接して大里吉見中学校(現製薬工場)が建設された際、残存していたいくつかの古墳が削平された。その後、甲山古墳の南に、わずかに残った半壊の古墳も破壊されて、現在甲山古墳の周辺には、まったく古墳はみられなくなった。

伝承によれば、甲山古墳周辺の古墳群は、大部分埴輪を施設していたようである。大里吉見中学校建設工事のとき、古墳の削平に立ち会った根岸喜夫氏は、古墳から多量の埴輪が出土したことを記憶している。川島達人所蔵の人物埴輪頭部は、この時出土した一つだったという。⁽⁵⁾ 甲山古墳群周辺の古墳群も、おそらく大方の古墳が埴輪を施設していたと考えていいだろう。

大境古墳群 (第1図11) 青山の南東の端、東松山市東平新田に隣接する大境地内には、昭和30年(1955)ごろまで二基の古墳が残存していた。現在この地域の古墳はすべて消滅して、古墳群の内容は定かではなくなったが、伝承によって推測すれば、数基の小円墳によって構成された小規模な古墳群と考えてよいだろう。

この古墳群は、主体部や遺物の概要を知る多数の手掛かりが残されている。昭和30年ごろ、大境で二基の古墳の削平を見物した根岸喜夫氏によれば、二基の古墳はいずれも封土内に石室が確認されたという。石室の形状や規模など詳細な内容は定かではなかったが、おそらく泥岩を用いた横穴式石室と考えて間違いなさそうであった。

遺物は、二基のうち「西側の古墳から鉄刀、東側の古墳から人物埴輪が出土した」という。これ以外の遺物については、まったく不明だったが、石室が仮に良好に遺存していたとすれば、副葬品

は「鉄刀」以外に更に多く残っていたはずである。他の副葬品は、墳丘削平の際ことごとく消滅したのだろう。

「西側古墳から出土した鉄刀」は、現在橋本岩吉氏によって保存されていた。三片の断片に破碎されていたが、全長65cmほどの直刀であった。「東側の古墳から出土した人物埴輪」は、東京に在住する川島達人氏が所蔵している。現存長34cmの農夫埴輪の上半身である。昭和30年ごろ、たまたま古墳の破壊に立ち会った根岸喜夫氏が採集して知人の川島氏に贈ったという。根岸氏はその時、道端には、更に多数の円筒埴輪の破片が散在していたと記憶していたが、その埴輪は現在すべて散逸している。

瀬戸山古墳群（第1図12） 大里村の西部、恩田地内に分布する古墳群である。山林中に、現在四基の小円墳が残存している。出土遺物や主体部は不明であるが、周辺の踏査では埴輪片がまったく採集されなかった。残存する古墳の形状や規模などから推定して、7世紀に出現した最終末の古墳群と考えていいだろう。

第1表 三千塚古墳群概要

支群	要項 号墳	外形	大きさ 長径 短径 高さ	外部施設		内部構造				出土遺物	担当班	その他特記事項
				周溝	埴輪	形式	方向	用材	玄室 長短			
三	4	円墳	22.1 _{1.5} ^m	有	無	横穴式	南々西	瀬戸山	1.55×2.00(?) ^m	よこへガラス小玉156 鉄鏃銀環刀子セメカナヅ	4	
"	3	"	25×24 ₅	"	"	"	ほぼ南北	"	"	鉄鏃	5	・玄室に胴張り ・筒じきり石に溝
"	16	"	22 ₄	"	"	"	南北	"	2.8×1.6	直刀刀子鉄鏃 金銅環	5	
"	8	"	2	"	"	竖穴式	"	"	4×2	"	6	・石室の位置は後込め 粘土より推定
"	13	"	15×14 _{0.75}	"	"	横穴式	南西	"	"	"	6	
"	14	"	16×14 _{1.5}	"	"	竖穴式	南西	"	2×1.3	"	6	封土中より玉ト石
五	1	前方後円墳	45	"	"	後円横穴 前方竖穴	南々西東	"	"	ツバ2	1	
"	2	円墳	18×17.5	"	有	横穴式	南	"	"	"	1	
"	3	"	17.5×16	"	無	"	西々南	"	1.6×5	ツバ鉄鏃鉄環	1	
"	4	方墳	25×23	"	"	"	"	"	"	"	1	石室不明
"	6	円墳	13×11	"	"	"	"	"	"	"	1	
七	25	"	30 _{3.5}	"	"	竖穴式	N-28-E	"	1.3×4.7	須恵器	4	
"	5	"	25 _{2.0}	"	有	"	N-42-E	"	"	鉄鏃、埴輪（円筒形象）	4	
"	28	"	24 ₍₂₎₍₅₎	"	"	横穴式	南北	"	"	鏃片	5	埴輪は溝中より発見
"	3	"	"	"	"	竖穴式	南西	"	2×1.5	埴輪	6	
"	4	"	"	"	無	"	南西	"	不明	"	6	
八	11	"	15×13 ₂	"	"	"	南々西	"	2.4×0.85	"	2	
"	9	"	11 ₁	"	"	"	西々南	"	1.7×0.78	"	2	
"	6	"	11×10 ₁	"	"	"	南々西	"	2.5×1.2	鉄環	2	
"	5	"	8 _{0.5}	"	"	"	東々北	"	1.7×0.8	"	2	
"	8	"	13 _{1.5}	"	"	"	南南西	"	2.27×0.9	"	2	
"	17	墳丘不明	"	不明	"	横穴式	"	"	3×1.5	金銅環	2	
"	18	"	"	不明	"	箱式石棺	東々北	"	0.9×0.4	"	2	
"	1	前方後円墳	36前中15 後35 1.8	有	有	後横穴 前方竖穴	南	"	4×1.5 2.2×1.0	銀環	2	
"	2	円墳	25 ₂	"	無	竖穴式	南西	"	2.4×1(?)	鉄	2	
"	3	"	30 ₃	"	有	横穴式	N-54-E	"	0.95×2.4	ツカ頭、刀子、鉄鏃、須恵器	4	
"	4	"	23 _{1.5}	"	有	"	N-44-E	"	1.1×2.5	管玉、須恵器片	4	
"	7	"	20×22 ₃	"	無	竖穴式	東西	"	"	"	4	

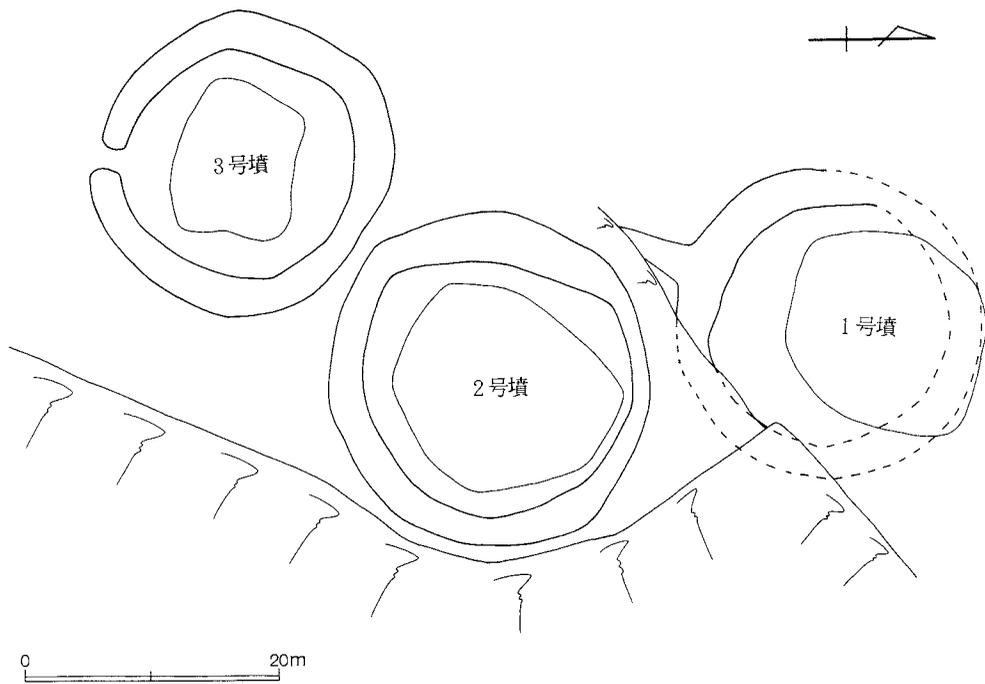
註

- 1) 金井塚良一編 三千塚古墳群発掘調査中間報告 1962
東松山市史 資料編 第1巻 1981
- 2) 原島禮二 「古代の東松山とその周辺—東松山市市史編纂報告」 1978
- 3) 註2に同じ
- 4) 『東京人類学雑誌』207号には北谷出土の人物埴輪の図が掲載されている。
- 5) 川島達人氏（東京都在住）の御教示に依る
- 6) 根岸喜夫氏の御教示に依る

Ⅲ 発掘調査の概要

1. 古墳群の概要

円山古墳群の残存する三基の古墳は、小丘北側の緩斜面に、ほぼ等間隔で築造されていた。古墳がのる小丘は、すでに東側が大きく削平され、南側も畑地として耕作されていたために、三基の古墳以外、古墳の所在は確認されなかったが、おそらく三基のほかに削平部分や畑地内にも古墳は存在していたのだろう。残存した古墳を北側から1号墳・2号墳・3号墳と呼称して、3号墳から順次発掘調査を実施した(第2図)。



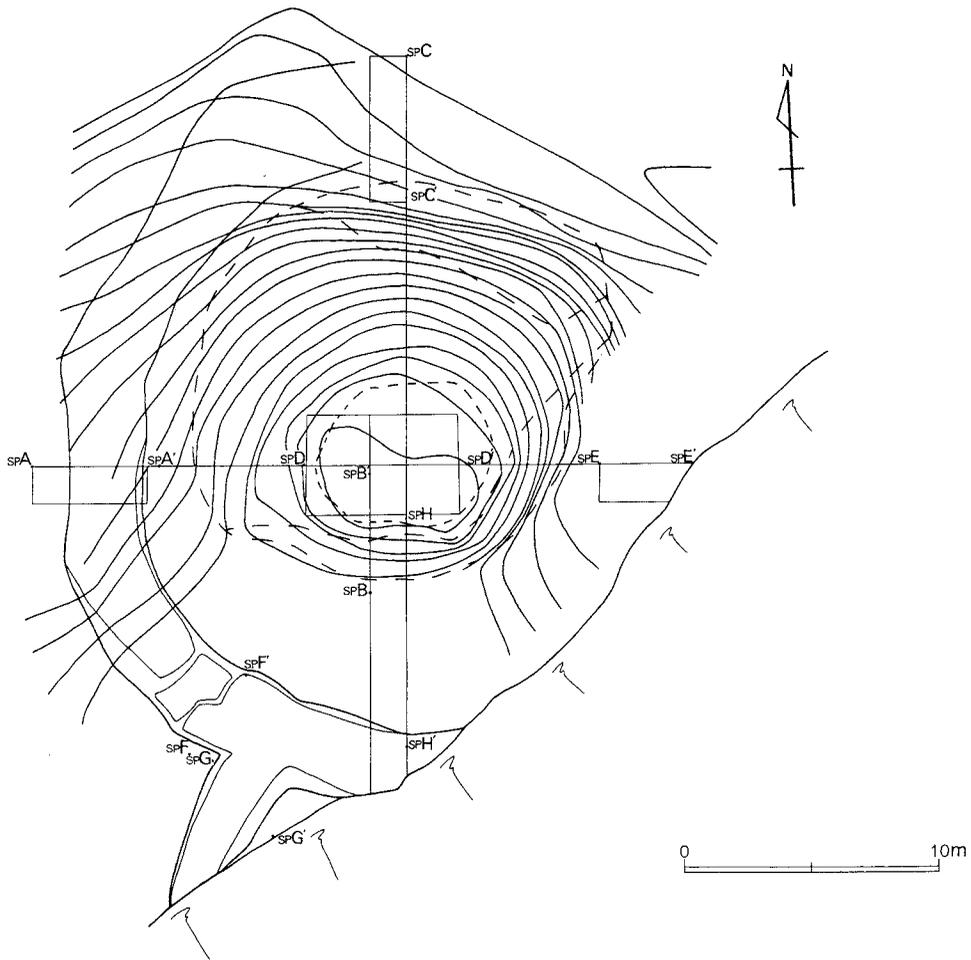
第2図 円山古墳群全測量図 1/600

2. 1号墳の発掘

1) 墳丘

現状 (第3図) 小丘の最北端に築造された1号墳は、墳丘東側、墳裾近くまで土取りが進行していた。現存する墳丘は長径(東西)17m、短径(南北)15m、高さ2.5mであった。墳頂部がひどく平坦で、しかも墳丘は大きく変形している。

盛土 古墳群が分布する小丘は、1号墳の付近から北側に次第に緩傾斜している。いわば、この小丘の緩斜面に築造された1号墳は、南側から観測すると高さ約2.5mの盛土が明確に確認された



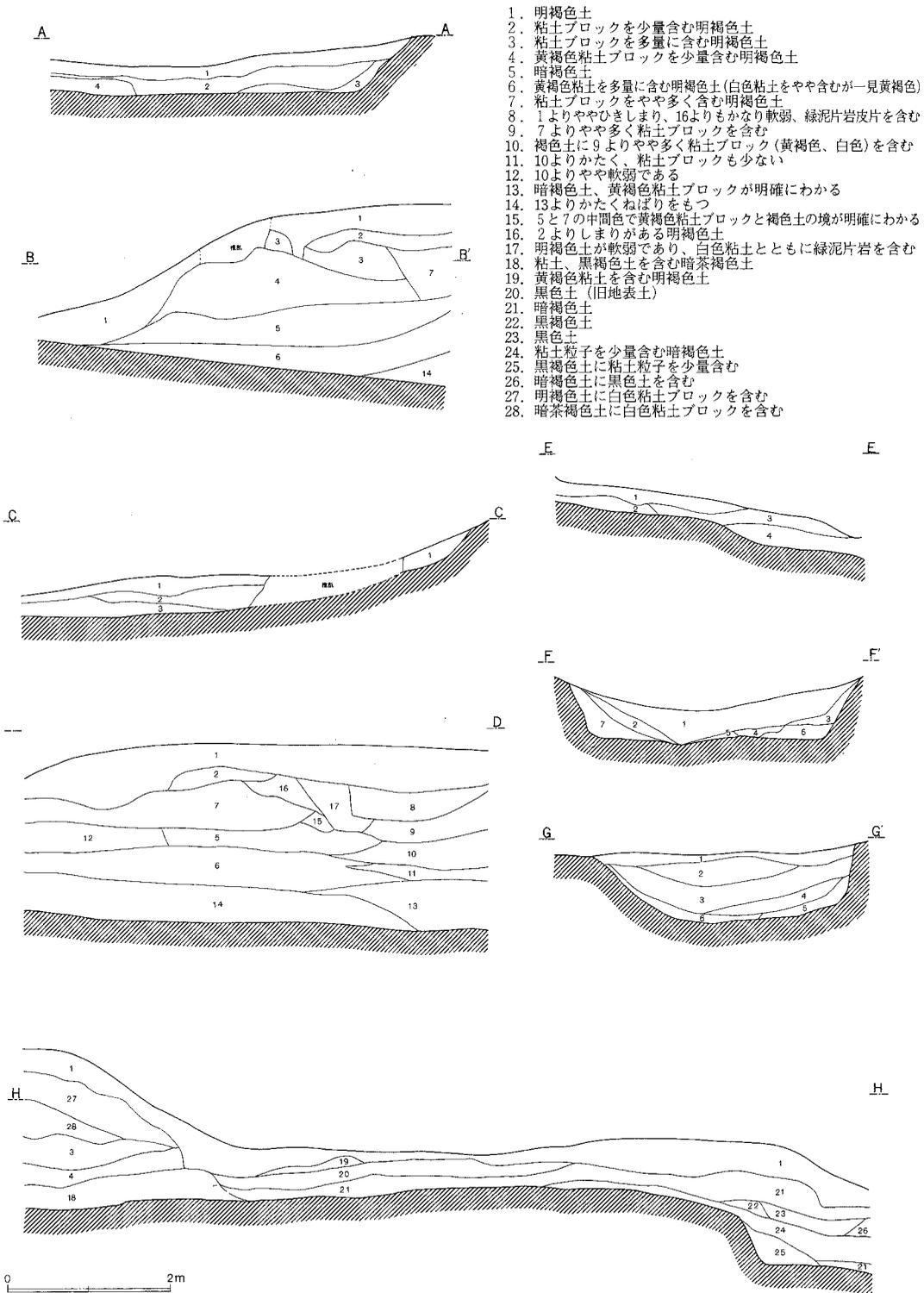
第3図 円山1号墳 墳丘とトレンチ配置図 1/300

が、北側は墳丘が自然に小丘斜面に漸移して、墳丘と認められる部分は僅かであった。

2) 周堀

1号墳の東側、墳裾近くまで迫った土取りによって、東側の周堀はおそらく破壊されたと推測されたが、周堀の全体を確認するために、墳丘の東・西・南・北に4本のトレンチ（A～Dトレンチ）を設定して、まず周堀の位置を探索した（第3図、第4図）。

A～Dトレンチによって南側（Cトレンチ）と西側（Bトレンチ）から周堀が検出された。南側Cトレンチでは、現墳裾から約5.6m隔てた所から、深さ約1m、底部が平坦な落ち込みが明瞭に確認されたが、先端が土取りによって削られていて、幅員と形状は不明だった。西側、Bトレンチでは、設定したトレンチ内で深さ68cmの落ち込みが検出された。ここでは、落ち込みはCトレンチと同様に平坦な底部を呈していたが、幅が大きく縮小されていて（約3.4m）、しかも、外側の立ち上がりは僅かであった。内側と外側の掘り方には大きな隔差が認められたのである。東側（Aトレンチ）と北側（Dトレンチ）からは、南・西側に対応する落ち込みは検出されなかった。



第4図 円山1号墳 墳丘及び周堀覆土断面図 1/80

南側と西側から検出された落ち込みは、墳丘を廻る周堀の一部と想定された。東側では、土取りによって周堀はすでに削られていた。北側は、1号墳が小丘斜面に構築されていたために、最初から掘削されなかった可能性も考えられる。南側と西側で検出された落ち込みを基準にして、二つのトレンチを拡張し、周堀の全体を探索した。

周堀は、BトレンチとCトレンチの間で確認された。発掘の知見では幅3～3.5m、深さ1m前後、平底の概して整った周堀が、墳丘南側と東側にかけて掘削されていたようであるが、東側は土取りによってすでに削られて、全体の形状は不明であった。BトレンチとCトレンチのほぼ中間に、周堀を掘り残して、幅1.5m、堀底よりの高さ約45cmのブリッチ状の平場が施設されていた。後述のように主体部が不明で、主体部との位置関係は明らかではなかったが、主体部に通ずる通路の可能性を考えてよいだろう。なお、西側では、Bトレンチを拡張して周堀を探索したが、北側約40cmの部分で落ち込みが消失し、周堀は北側に接続していなかった。この部分では、幅も次第に狭まって、最後は自然に地山に変わっていた。北側Dトレンチの知見と合わせて考えると、小丘の斜面に盛土された1号墳は、地山が傾斜する西・北側には周堀は掘削されていなかったのかもしれない。

南側の周堀を基準にして、原墳丘を推定すると、現在の盛土は、北側傾斜面にかなりずれていることになる。南側は後次の削平が著しかったが、北側は盛土がかなり斜面に崩落して、1号墳は、原状とは全く異なった墳丘に変形していたようである。

3) 主体部

墳丘南側の盗掘坑は、部分的に墳頂下2m近くまで掘られていた。墳丘南側も不自然に削平されていて、この古墳のひどい破壊は、一見して明瞭だったが、Cトレンチを延長して(Eトレンチ)、墳丘の破壊状況を調査しながら、墳頂部にGトレンチを設定して、主体部の探索を行った。

Eトレンチで確認された墳丘南側の破壊は、予想以上にひどい状況だった。ここでは盛土の中に地山の粘土ブロックや小砂利を含む土層が多量に混入していて、後次的な攪乱が明瞭だった。しかも攪乱は盛土の底部まで及んでいて、主体部の徹底した破壊が考えられたのである。

Gトレンチでは、墳頂下の破壊を考慮して、途中からトレンチを更に拡大し、長さ(東西)4m、幅(南北)3.5mの範囲を墳頂下地山まで掘り下げて、主体部を探索した。ここでも盛土の攪乱が激しく、石室の用材と推定された緑泥片岩の断片や粘土塊が乱雑に混入し合っていて、徹底した破壊の状況が看取された。墳頂の拡張区を地山まで掘り下げたが、遂に1号墳の主体部の形状を確認することは不可能だった。

4) 遺物の出土

南西側の周溝覆土中から埴輪の小片が少量出土した(第23図)。いずれも円筒埴輪の断片で、形状は不明である。他に同じ箇所から土師器と須恵器の破片も出土しているが、やはり小片で実測に耐えるものではなかった。

3. 2号墳の発掘

1) 墳丘

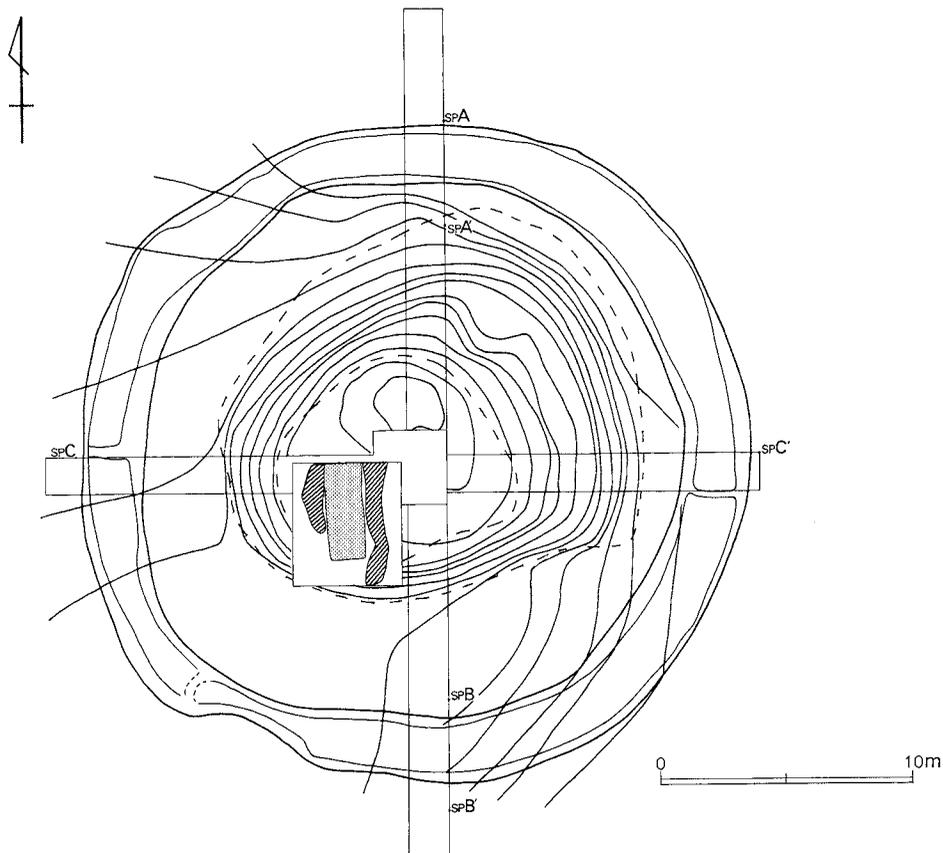
現状（第5図） 三基の古墳の中間に位置している。とくに3号墳に近接して、現墳丘を基にした二つの古墳の間隔は1.2mであった。

現墳丘は南・西側が酷く削平されて、原状を大きく変形していたが、東・北側は比較的自然的な盛土が維持されているようであった。墳丘規模は、現状では長径16.6m、短径12.6m、高さ2mである。墳頂部と東・北側には大きな攪乱坑が認められた（第6図）。

盛土 墳丘に東・西・南・北のトレンチ（A～D）を設定して、墳裾で、周堀の確認を行い、同時にそれぞれのトレンチ間の表土を剥いで、盛土の旧表を探索したが、東・北側の一部を除いて、旧表はほとんど破壊されていた。東・北側の残存部分でも旧表と想定された茶褐色土の堆積は僅かで、小礫や緑泥片岩の小片が混じる攪乱土が覆っていた。しかも、主体部周辺の墳丘表土中から金環も出土して（第33図）、墳丘の損壊、おそらく主体部の盗掘がこの古墳でも激しく行われていたと推測されたのである。2号墳も主体部の遺存はほとんど絶望的と想定された。

2) 周堀

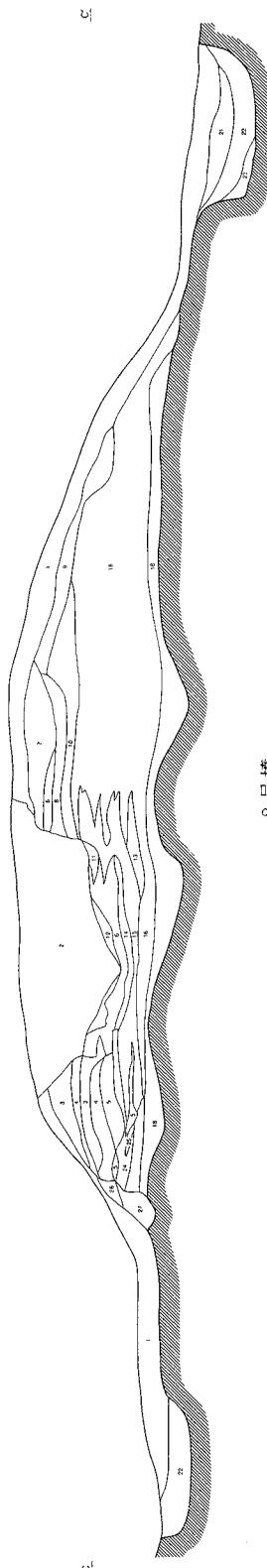
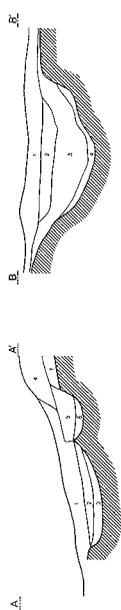
東・西・南・北のトレンチ（A～Dトレンチ）によって、墳丘を廻る周堀が確認された。A～Dトレンチを拡張して、周堀の全容を露出したが、周堀は墳丘をほぼ正円で全周し、ブリッチなどの施設は認められなかった。掘り方は場所によって多少異なっていて、東・北側がどちらかといえば



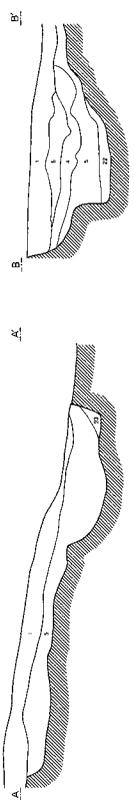
第5図 円山2号墳 墳丘とトレンチ配置図 1/300

- 13. ポソポソした黒褐色土
- 14. しまりのある暗褐色土
- 15. ロームブロックに褐色土と黒色土のブロックが混入している
- 16. しまりのある明褐色土
- 17. 凝灰質砂岩のブロックを含む褐色土、ポソポソしている
- 18. 17と同じだが砂岩が少い
- 19. 黒色土
- 20. ポソポソした褐色土
- 21. 11より暗くポソポソしている
- 22. ロームブロック、ローム粒子を少量含む赤褐色土、少し粗粒をおび
- 23. ローム粒子を含む褐色土

- 1. 暗褐色土
- 2. 1と同じだがポソポソしている
- 3. 黒褐色土
- 4. 黒色土
- 5. 2と同色だが多少ロームを含む
- 6. 3と同じであるがしまっている
- 7. ロームブロックからなる褐色土
- 8. ポソポソしたかんじの褐色土、石とローム粒子を含む
- 9. 8と同じであるが細かい
- 10. ローム粒子を多少含む暗褐色土
- 11. ポソポソした黒色土
- 12. ロームブロックを少量に含む暗褐色土

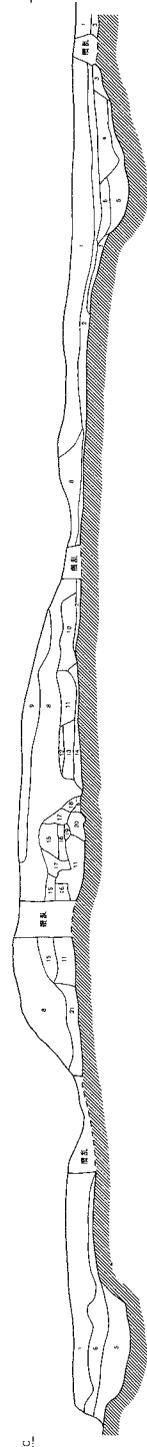


2号墳



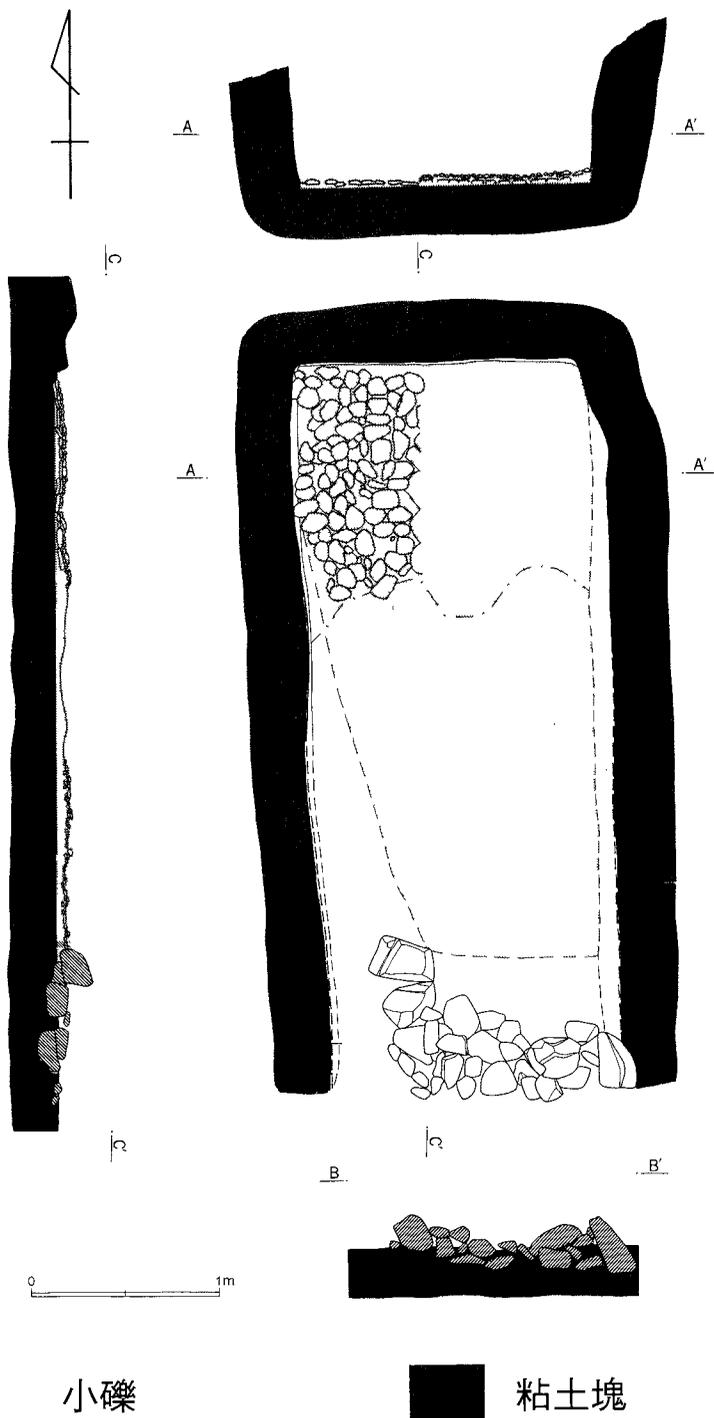
- 1. 赤褐色土
- 2. 攪乱 褐色土
- 3. 褐色土少し入る軟質褐色土
- 4. 褐色粘土が多く入る褐色土
- 5. 褐色粘土がブロック状に入る黒褐色土
- 6. 白色粘土
- 7. 暗褐色土
- 8. 粘土ブロック入る黒褐色土
- 9. 褐色粘土が少し入る暗褐色土
- 10. 褐色粘土ブロックが少し入る黒褐色土
- 11. 黒色土が入る黒褐色土
- 12. 白色粘土が多い黒褐色土
- 13. 褐色粘土ブロックが少し入る黒褐色土
- 14. 凝灰質砂岩のブロックが入る右褐色土
- 15. 褐色粘土ブロックが入る黒褐色土
- 16. 褐色粘土ブロックが多く入る褐色土
- 17. 暗褐色土
- 18. 堅質黒色土
- 19. 粘土質ローム
- 20. 褐色粘土
- 21. 暗褐色土、少量の炭化物を含む
- 22. 暗赤褐色土
- 23. 褐色土、ロームブロックを少量含む
- 24. 褐色粘土ブロック
- 25. 黒褐色土
- 26. 凝乱アカフカ
- 27. 凝乱アカフカ黒色土

3号墳



3号墳

第6図 円山2・3号墳墳丘及び周堀覆土断面図 1/40



第7図 円山2号墳 主体部実測図 1/40

深く（約1.28m）、幅も広がった（約2.5m）が、西側と南側は、概して浅く（約70～30cm）、しかも次第に狭められていた（約1～1.2m）。とくに3号墳に近接する南西側では、不自然に狭められた箇所も検出されている。この部分が、3号墳に最も接近する場所であることを考慮すると、あるいはこの不自然な屈折は、3号墳の周溝との接触を避けた故意の造作と考えることも出来るだろう。3号墳との先後関係を考える手掛かりの一つと考えられたのである。

2号墳の周堀は、総じて基底部分が平坦で、基底からの立ち上がりは急であった。

3) 主体部（第7図）

2号墳も1号墳と同様、墳丘は大きく破壊されていた。特に墳丘のほぼ中央部が、基底部まで掘り下げられていて（第6図）、すでに主体部を対象とした破壊が大きく行われていたことが明確だったのである。

2号墳の主体部は、墳頂下の攪乱層を除去した後、墳頂下1.8mの基底部から、僅かに石室の痕跡が確認された。確認された石室の痕跡は、玄室入り口部と想定された箇所に、凝灰岩質砂岩の切石の一部と粘土塊、玄室内に礫床と推測される円礫の集積が遺存していたが、石室の形状を伝える奥壁・側壁等の構築材はすでに完全に除去されていた。

礫床は、玄室のほぼ全面に遺存していたが、南側半分は礫の配列が粗雑で、奥壁側約1.2mの範囲は比較的現状を保持しているようであった。特にこの範囲では、西側、側壁に接する箇所の礫床には径約10～15cmほどの河原石が平坦に敷きつめられていて、東側の小礫の配置と明瞭な相違を示していた。あるいはこの部分に、棺が置かれていた可能性も考えられたのである。

礫床の外側は壁体の石材がすでに除去されていて側壁の形状は不明だったが、後込めと推測される粘土塊が部分的に残存していた。粘土塊の残存状態と礫床の形状によって、2号墳の主体部は凝灰岩質砂岩の切石を使用した横穴式石室と想定したが、形状は不明である。なお、礫床に依って確認された主体部の位置は、現在の墳丘中心部より南西に約3mほど偏した場所に在った。長軸の方向はほぼ南北を指していたと考えてよいだろう。

4) 遺物の出土（第16図～第22図、第24図～第29図、第33図）

主体部礫床上から、柄頭、鉄鏃、刀子などの金属類、周堀から多量の埴輪（象形埴輪、円筒埴輪）と須恵器、土師器の断片が出土している。

主体部から出土した金属類は、僅かに遺存した礫床上から、散乱した状態で検出された柄頭1点・刀子2点・鉄鏃7点を数えたが、ほぼ完形な鉄鏃2点のほかは、いずれも断片だった（第32図）。

2号墳は、三基の古墳のなかでは、主体部の痕跡が遺存した唯一の古墳であった。それにしても遺存した主体部は礫床の一部だけで、この古墳の主体部の攪乱も、他の二基と同様にすさまじかったのである。遺物は、僅かに遺存した礫床上から出土しているが、散乱した出土状態は、これらの遺物がすでに原位置から離れて放置されていたことを明瞭に示していた。おそらく主体部の破壊の際、大方の副葬品は持ち出されて、僅かに遺物の一部が礫床上に残されたのだろう。

円筒埴輪は周堀のほぼ全域から出土している。いずれも小片で、完形なものは1点だけだったが、出土状況によって、2号墳では円筒埴輪が一周していた可能性は十分にあると考えてよさそうである。

象形埴輪は、墳丘東側の周堀内から集中して出土している。すべて破碎されていたが、ほぼ完形、

もしくは形状が確認できるまでに復元されたものが7点あった。内訳は靴形埴輪2点、鬚形埴輪2点、帽子形埴輪1点、人物頭部2点である。他に、形状が不明な形象埴輪の部分（細片）が数点出土している。

周堀内から、埴輪以外に鉄鏃、須恵器（長頸壺）・砥石・土師器（埴）なども出土した。量は微量だったが、いずれも周堀の埋土中から検出されている。

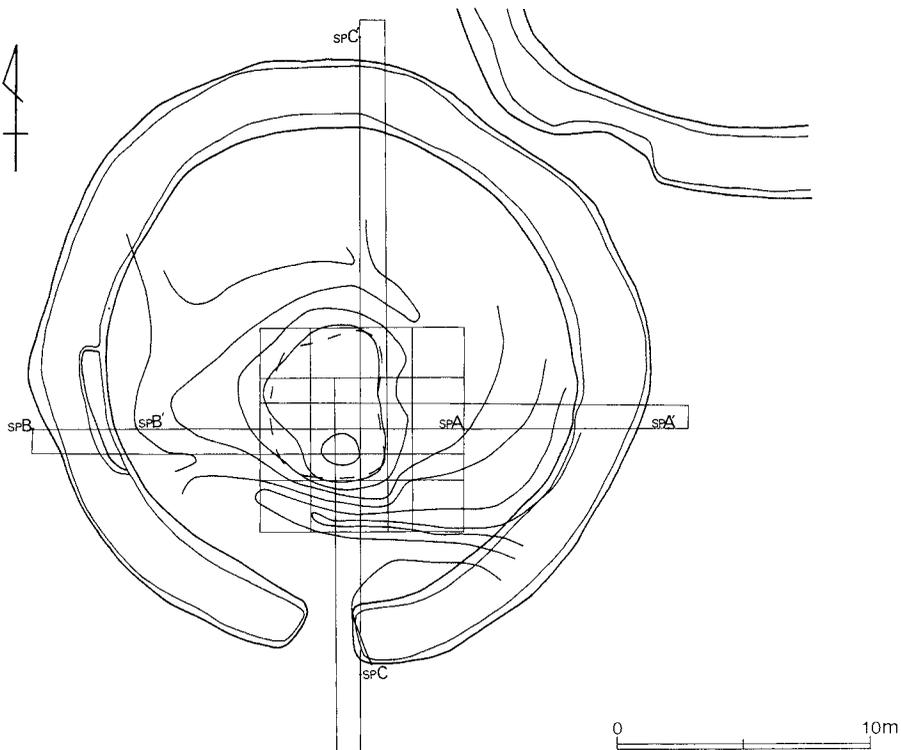
特に墳丘の南側周堀内から出土した須恵器（長頸壺）は、周堀の基底部から発見されていた。出土状態から想定して、石室の前庭に置かれた須恵器が、かなり早い時期に周堀内に転落したと推定されたのである。

4. 3号墳の発掘

1) 墳丘

現状（第8図） 三基の古墳の中、小丘の最も奥部に位置していた。この古墳も、墳丘全体が大きく削平され、原状を全く留めないほど破壊されていた。墳丘の中腹部には、西側から南側にかけて、鍵手状に走る境溝が掘られていた。遺存した現在の墳丘は、長径（東・西）7m、短径（南・北）5m、高さは1.2m。三基の古墳の中では、最も破壊が激しかった古墳だったのである。

盛土（第6図） 墳丘東側を削平して盛土の断面を観察したが、3号墳は、盛土の旧状がほとんど遺されないほど攪乱されていた。攪乱は、主体部の位置と想定された墳丘中央部がとくに甚だし



第8図 円山3号墳 墳丘とトレンチ配置図 1/300

く、この箇所では墳頂から旧表まで完全に破壊されていたようである。旧盛土が僅かに遺存した南・北の墳裾の部分も、旧盛土と推定された土層は小範囲だった。

2) 周堀 (第6図、第8図)

墳丘の東・西・南・北に4本のトレンチ(A～Dトレンチ)を設定して、周堀を探索した。その結果、4ヶ所のトレンチで、幅約2～2.5m、深さ1m前後の落ち込みが検出されたが、南側—Cトレンチの確認された溝の部分は僅かで、ここには溝から急に立ち上がる土堤状の平坦面が残されていた。これはおそらく、周堀に掘り残されたブリッチ状の施設と考えていいだろう。

4本のトレンチをそれぞれ拡張して、周堀の全容を追跡したが、周堀は、墳丘を全周していた。周堀の上幅は約2～2.5mでほぼ一定し、深さも1m前後であったが、2号墳に接近する東北部が最も深くなっていて、ここでは深さ1.6mを測った。堀底は平坦なU字状を呈し、堀底からの立上りは概して急であった。南側に、幅約2mのブリッチ状施設が設備されていた。

周堀に依って推測された3号墳は、径23～24mの墳丘を持つ古墳だったようである。

3) 主体部

3号墳の墳丘は、すでに完全に破壊されていた。したがって、主体部は、発掘当初から遺存の可能性はほとんど考えられなかったが、発掘の結果、やはり、その痕跡を全く留めないほど破壊されていた。それでも墳丘基底部に僅かに粘土塊と凝灰岩質砂岩の断片が遺存した箇所があって、その部分に主体部が築成されていたことを推測することは出来た。

しかし、規模と形状は全く不明である。

4) 遺物の出土 (第9図～第15図、第30図)

主体部からの遺物の出土は皆無である。周堀から、埴輪が出土している。埴輪は大部分円筒埴輪であったが、人物・馬・家などの形象埴輪片が、西側の周堀内からまとまって出土した。円筒埴輪は周堀内の広い範囲から確認された。いずれも断片であったが、3号墳でも2号墳と同様、墳丘を廻って円筒埴輪が施設されていたと考えてよいだろう。

なお、東側の周堀内から、須恵器(埴瓶)が出土している。これは、周堀内の埋土中から出土したもので、おそらく、主体部の破壊の際持ち出されたものであろう。

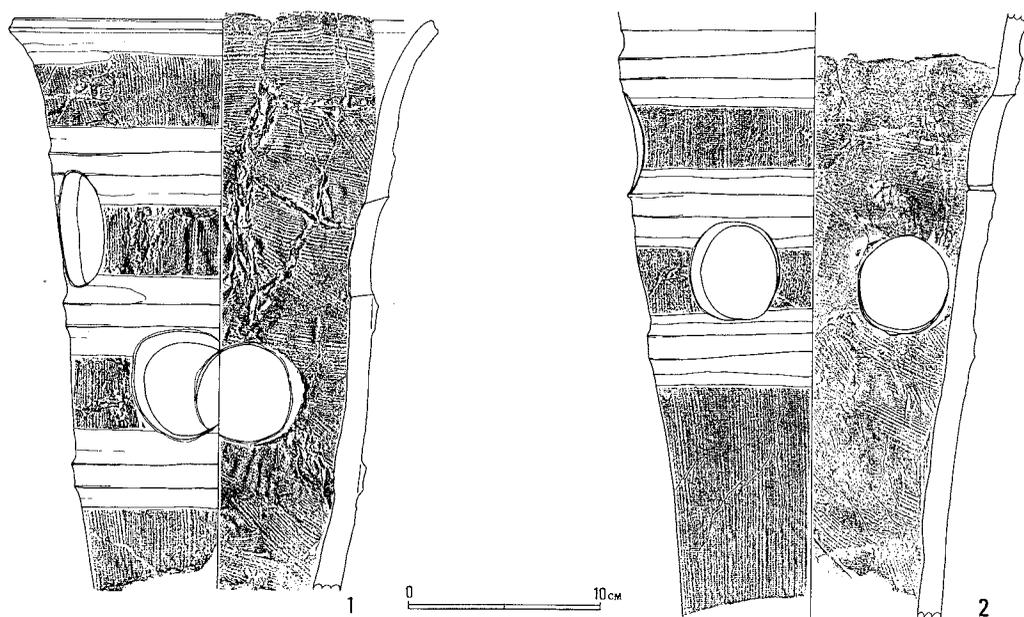
IV 考察

以上報告してきたように、円山古墳群は、発掘当時大破した三基の円墳だけが遺存する小古墳群であった。三基とも墳丘の大半が削平され、原状をほとんど留めていなかったし、主体部の状態も不明だった。その上出土品も散逸していて、主体部からの遺物の出土は皆無に等しかったのである。したがって、発掘調査の結果によって円山古墳群の性格を検討することは、かなり困難と考えられたが、幸いこの古墳群からは、埴輪（円筒埴輪と形象埴輪）が多量に出土している。しかも（数量に差異があっても）三基のすべての古墳から出土して、円山古墳群が埴輪を伴う古墳群であることが明らかだったのである。ここでは、出土したこれらの埴輪を主にして考察して、古墳群の形成と性格を垣間見ておくことにしよう。

1. 円筒埴輪

1号墳から3号墳まで、全ての古墳から埴輪が出土している。しかし、原位置での検出はなく、周溝内へ転落した状態で出土していた。

3号墳の円筒埴輪は、僅かに灰色に近い発色のものを含むが、暗褐色を基調とした土師質の焼き上がりのもが主体的であり、黒斑を欠いている点、外面調整がタテハケであり、2次調整を欠いている点、さらに凸帯が低平で断面がM字状を呈する点など、強い共通性をもっている。これは川西編年に照らせば第V期でも新しい段階に属するもので、互いに近接する年代の所産と推定される。しかし、3号墳と2号墳の間には、終末期の円筒埴輪の変遷過程を示すような重要な差異が認めら



第9図 円山3号墳出土 円筒埴輪実測図(1)



第10图 円山3号墳出土 円筒埴輪実測図(2)

れるので、個別に検討を行い、比較を行ってみたい。便宜上、3・2・1号墳の順に記述する。

1) 3号墳の円筒埴輪（第9図～第15図）

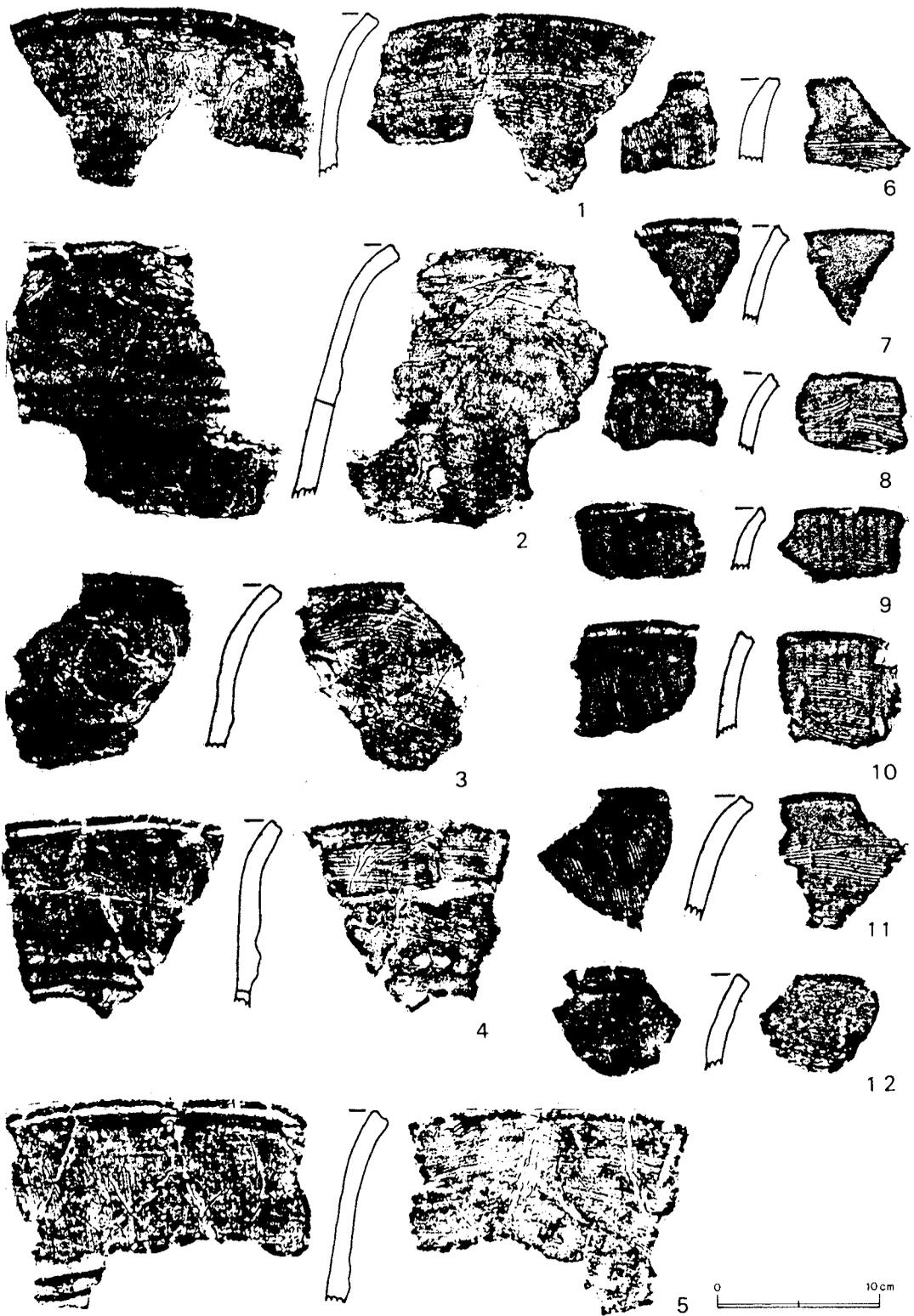
3号墳出土の円筒埴輪は、完形品及び半完形品から見る限り、全て3条凸帯4段構成のもので、円形の透孔が第2段と3段に方向を90°ずらして一対ずつ穿孔されている点で共通している。法量については若干のバラツキがあるものの、完形品（第10図-4）を参考にすれば、全高48.6cm、口径29.6cm、底径13.6cmであり、個体間に著しい差異は認められない。注目すべきは、器形及び凸帯貼付位置のプロポーシヨンの類似性である。まず、器形については、口径に対して底径が著しく小さく製作されていて、その比は略2：1である。加えて直径に対して内輪高が大きいため、全体としては、細身で不安定な印象を与えている。第2に凸帯貼付位置については、第1凸帯の位置が通常の円筒埴輪に比べて、非常に高い位置に貼付されており、それが全器高のほぼ中間にある。そして、第2、第3凸帯の位置は上半分を3等分する位置に貼付されている。このため、全体的に見れば凸帯貼付位置による各段のプロポーシヨンは第1段：第2段：第3段：第4段が略2：1：1：1ということになる。このような約束事に基づいて、同一の規格によって円筒埴輪が製作され、これから逸脱するものが認められないのは、3号墳の円筒埴輪が全て、同一工人集団によって一元的に供給されたものであることを推定させるに十分であろう。

第9・10図は完形および半完形品であり、全高の器形と各段のプロポーシヨンを知ることができる。底部から第3凸帯までは徐々に径を増していくため、直線的な開き方を示すが、口縁部は一転して、外反を持たせて大きく開かせている。口唇部は調整の最終的段階に、ヨコナデ調整が行われ、その際一指が端部に当てられていたため、凹線状のくぼみとなって表れている。

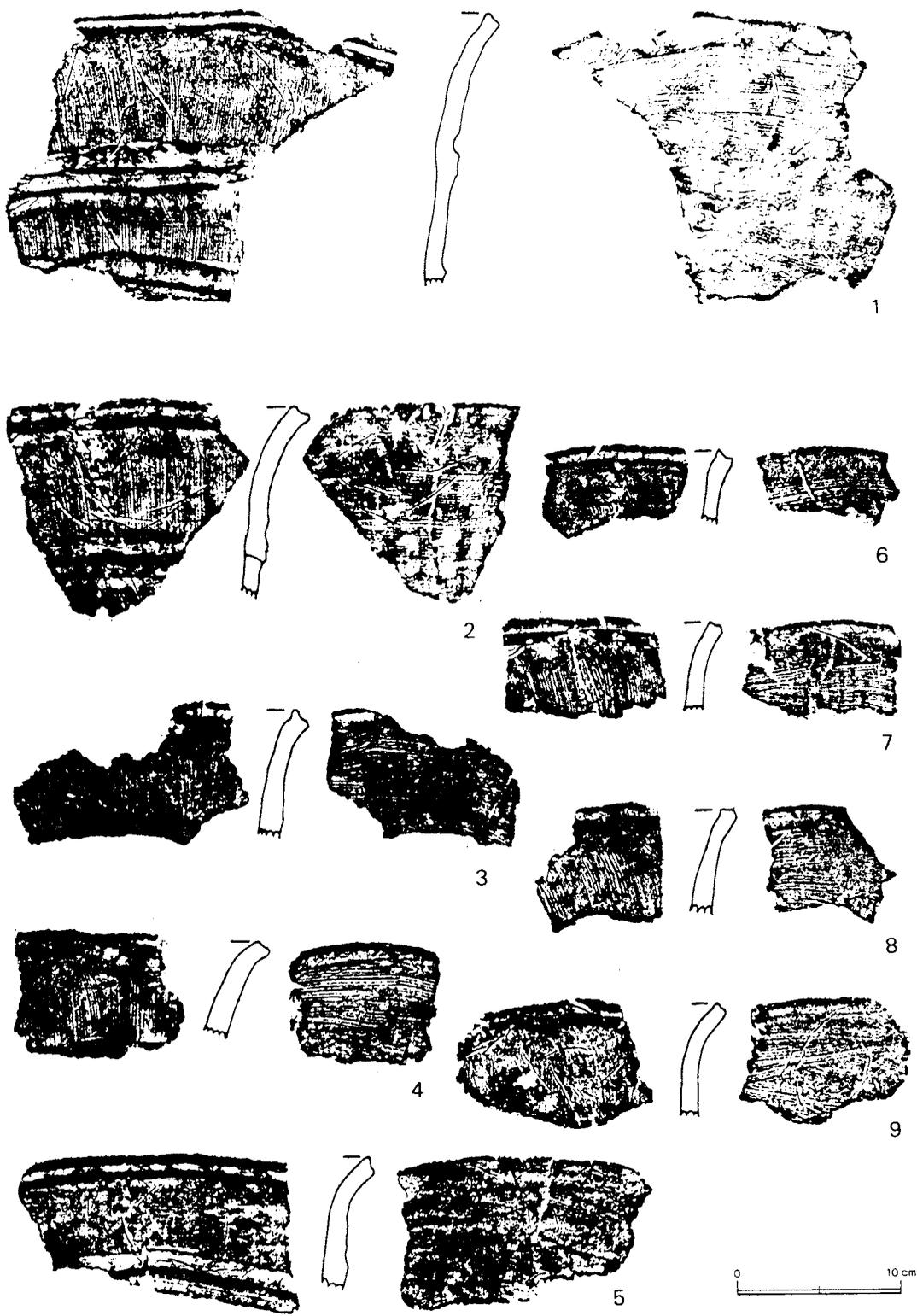
第11・12図は口縁部破片の拓影図である。全体が弓なりに外反して開くものが主体的であるが、開き方が小さいもの（第11図-5）と端部直下で急激に屈曲するもの（第11図-4、第12図-5）が小異として認められる。

第13・14図は胴部破片の拓影図である。凸帯は均しく底平で、断面がM字状を呈している。これは外面調整後、器壁に薄い粘土紐を貼付した後に人指し指・中指・薬指の3指を用いてヨコナデ調整を行っている結果できるものであり、密着度が高いために、凸帯が脱落するようなことがない。透孔は凸帯の調整後に、刀子のような鋭利な工具を用いて、円形に一気に切り抜かれている。段間（凸帯と凸帯の間）が狭いために、透孔は凸帯の上下のヨコナデ部分を切り取るような形で、目一杯の大きさ（平均5cm前後）に穿孔されているものが多い。

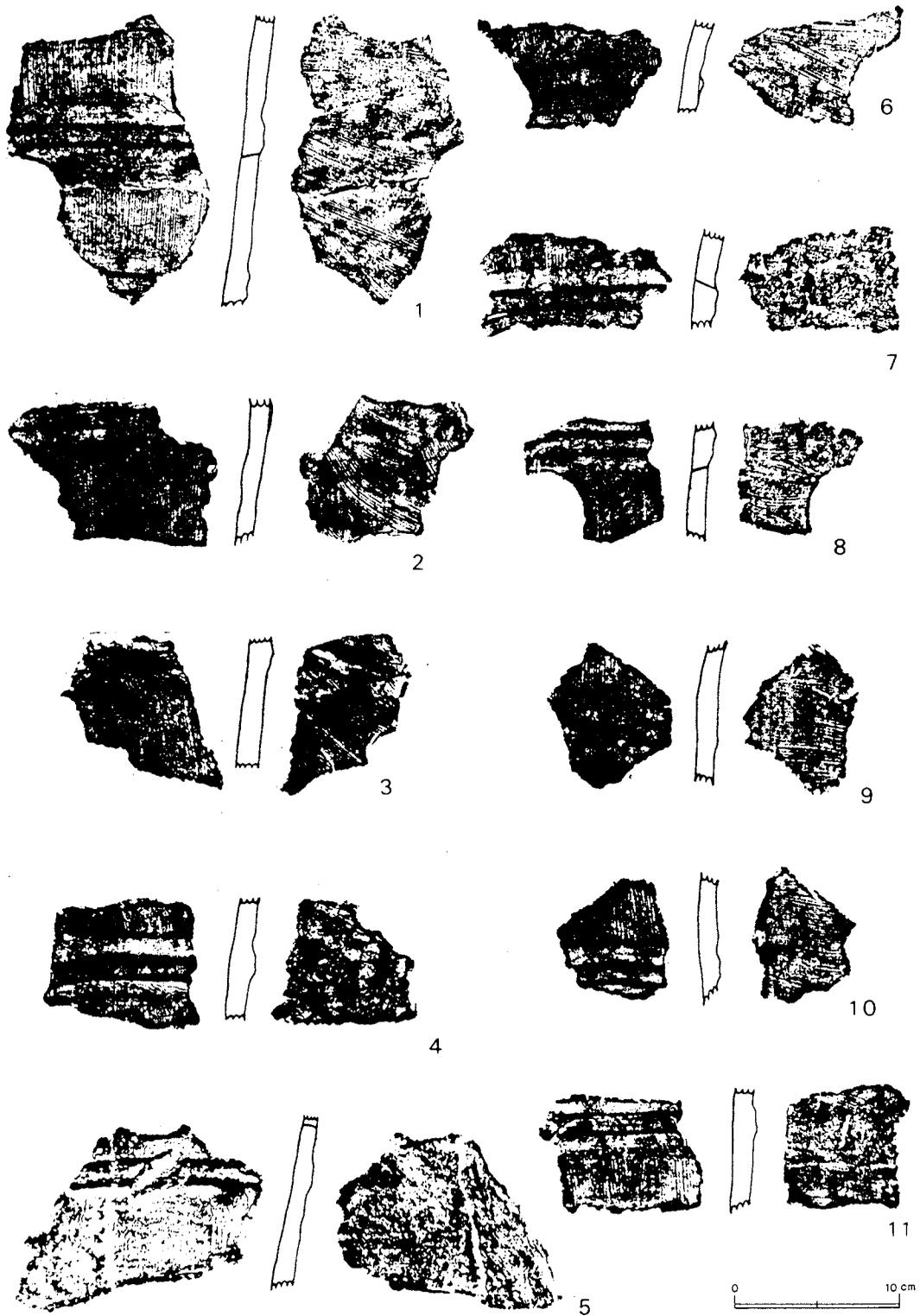
第15図では底部破片の拓影図である。注目されるのは底部調整技法の認められるものの存在である。第10図-3、第15図-1・2・6～9は底部外面のタテツケ調整痕が消え、斜め方向に板状工具の木理圧痕が認められる。これに対応して内面のハケメ調整痕が消えて、僅かな丸い凹みとなって残されていることから、内側に小石のようなものを当てて、外面を板状工具で叩いたものと考えられる。この結果、1単位ごとに打撃面が平面をなし、全体としては多角形状の底面に変形した例（第15図-6）も認められる。底部調整技法は川西氏の説に説かれるように、短時間で一気に製作した円筒埴輪の場合、その自重に耐えられず、底部が変形する結果を招く。この変形は外観が見苦しいのみではなく、ヒビや亀裂のために、乾燥や焼成過程で割れて失敗品となる危険性をはらんで



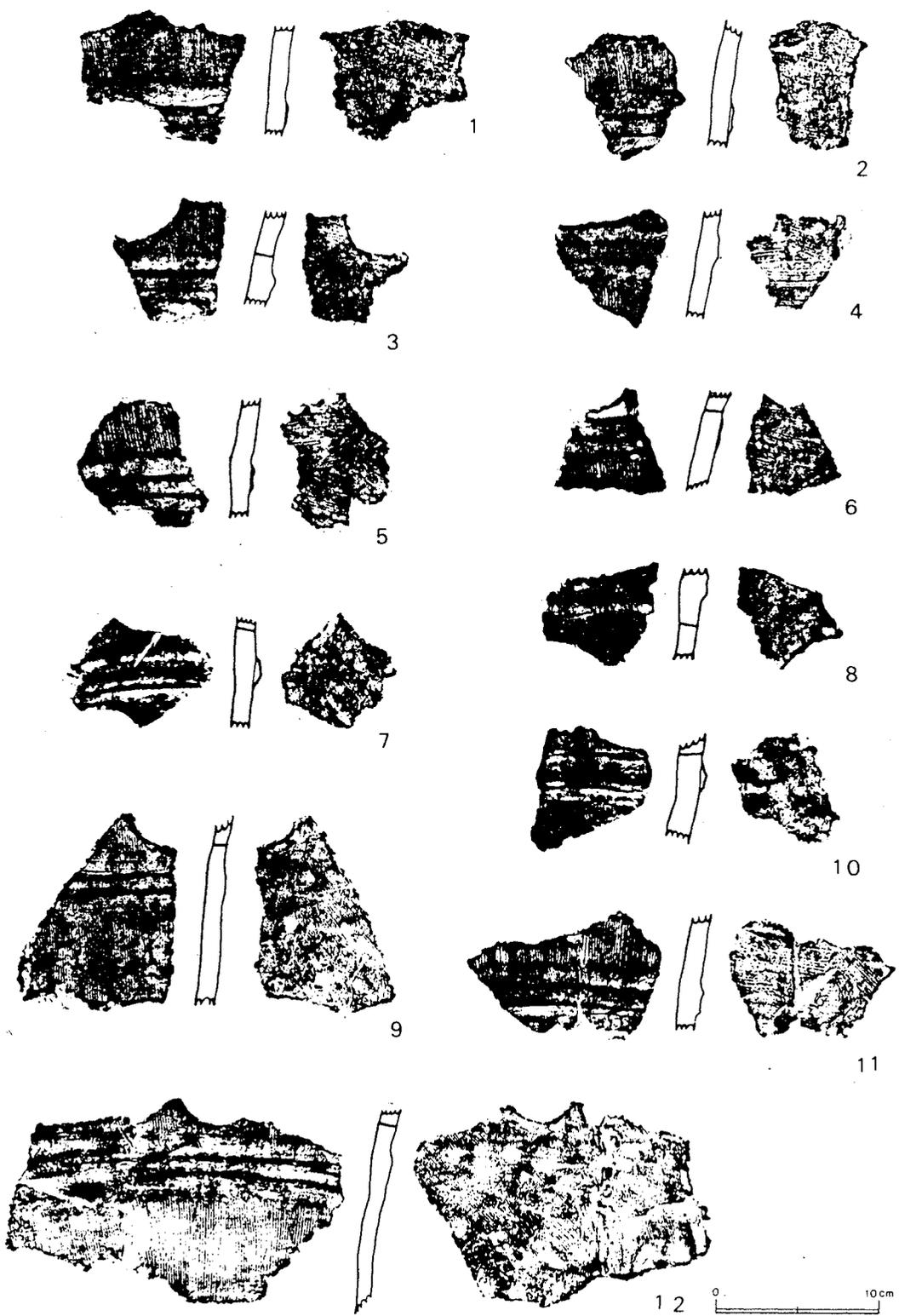
第11图 円山3号墳出土 円筒埴輪拓影图(1)



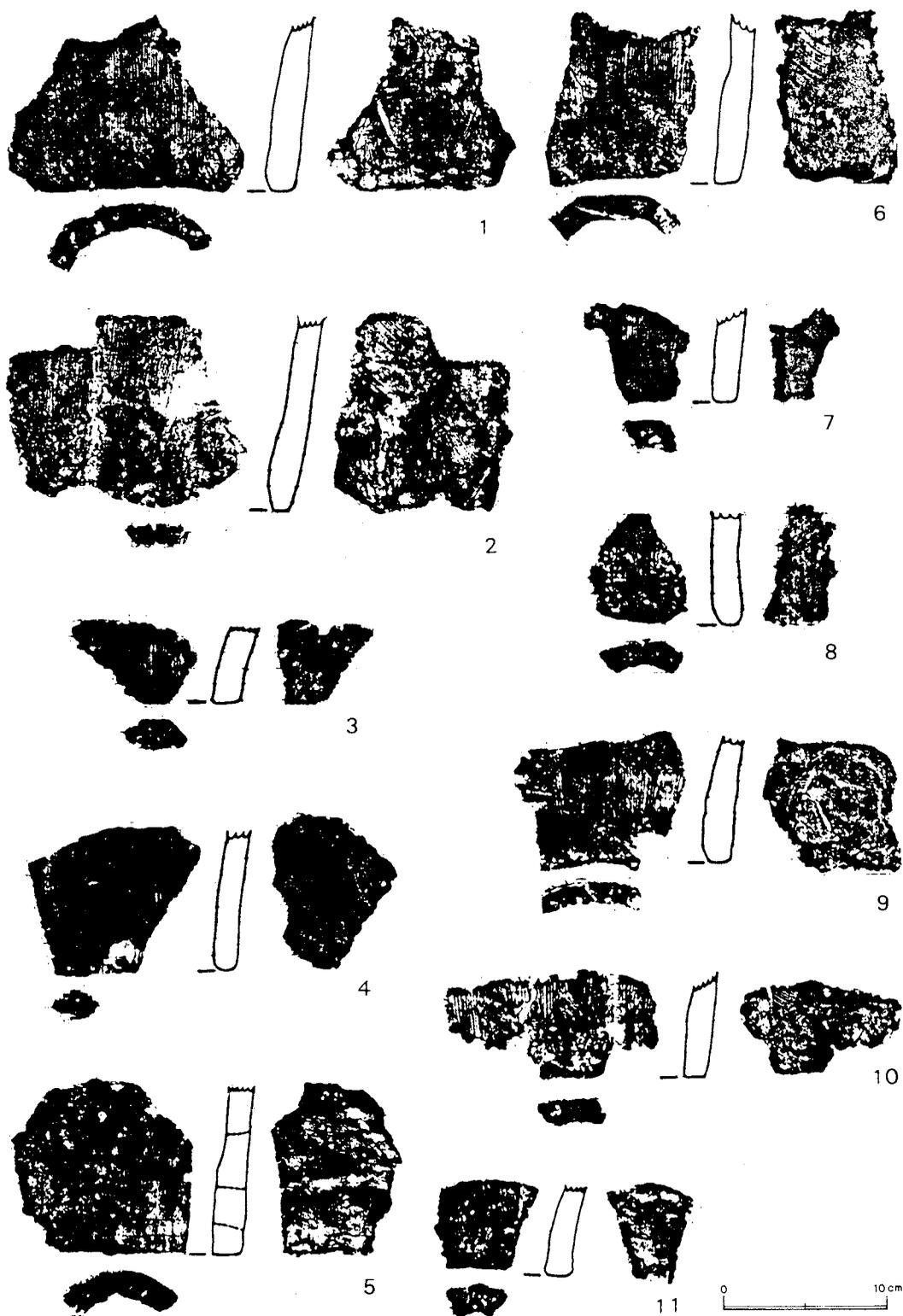
第12图 円山3号墳出土 丸筒埴輪拓影图(2)



第13图 円山3号墳出土 円筒埴輪拓影図(3)



第14图 円山3号墳出土 円筒埴輪拓影图(4)



第15图 円山3号墳出土 円筒埴輪拓影図(5)

いる。これを防止するために、最終段階で埴輪を倒立させ、底部を叩きしめによって調整する行為だと考えられる。円山3号墳の場合、底部調整を施すものと、これを欠くもの(第10図-4)とが共存していることから、底部調整技法は必要に応じて選択的に行われたものと解釈していいだろう。尚、外面に叩き調整を加えた円筒埴輪の一部には、さらに底部内面をヘラ状工具によって横方向に削るもの(第15図1・2・8・9)が存在している。これは、叩き調整の結果、二次的に内面にはみ出した粘土を削除するために行われる副次的な調整技法と考えられよう。

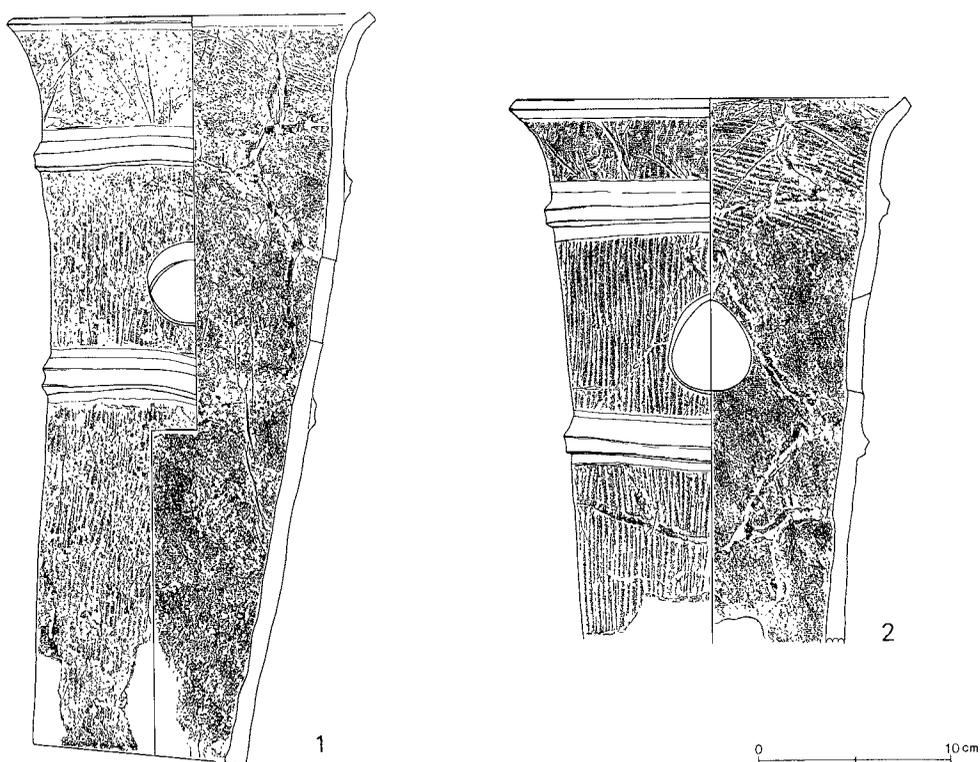
最後に、内外面全体の調整技法について触れる。外面調整は全てタテハケ調整を行っているが、このハケメの圧間距離は非常に長く、第10図-4を参考にすれば、少なくとも、底部下端から第1凸帯の位置、つまり器高全体の半ばまで一気に引き通している。このハケメが口縁部まで連続するものであるか否かは、凸帯に遮られて完全に把握することはできないが、上半のタテハケメも連続している例(第10図-2)があるので、最低1回、最大2回で調整を終了しているものと判断される。

内面の調整もやはりハケメ調整を全面に亘って行っているが、完形品(第10図-4)を参考にすれば、底部から胴部までは斜ハケメで口縁部のみがヨコハケメである。加えて、斜ハケの傾斜度は底部付近ではきつく、上に行くに従ってゆるくなっている点に注意される。これは、円筒埴輪の成形が完了した後に、口縁部から手を差し入れて一気に調整を行っているための帰結と考えられよう。このように、一個体の製作を行うのに、途中で乾燥のための時間を与えず短時間で一気に行う方式を採っているために、前述のような底部調整技法が必要になったものと了解することができよう。

尚、第10図-3は、内面調整の手法が、他と異なっており、手を深く差し入れてヨコ方向に調整を行っているが、不十分な調整で終わっている。

2) 2号墳の円筒埴輪(第16図~22図)

2号墳出土の円筒埴輪は、完形品によって2条凸帯3段構成のものであることが知られる。半完形及び破片資料から検討しても異なった構成のものは含まれておらず、齊一差が認められることから、同一工人集団の製作品と判断して良さそうである。法量は完形品(第16図-1)によれば、全高39.2cm、口径19.2cm、底径11.2cmで、3号墳のものに比べると、二まわりほど小さい。そして、3号墳のものとの最も大きな相違点は、凸帯数が一条少なく二条の点である。しかし、器形の上では両者に強い共通性が認められる。その第一点は、底径に対する器高の比が共に1:3.5の近似値であり、細身で不安定な器形を呈している点である。その第二点は第一凸帯の位置が器高の丁度中央にある。つまり、底部が器高の半分を占めている点である。ところが、第二凸帯は透孔の位置からすると、はなはだ奇妙な位置に付されている。第二段と第三段の高さの比はほぼ2:1であり、結果的に胴部が長く、口縁部が短くなっている。そして、その間のびじた第二段には中央でなく、下位に寄って小さな円形透孔が穿たれている。全体としてバランスの悪いイメージを抱かざるをえない。仮にバランスをとろうとするならば、第二凸帯を第二段と第三段が均等になる位置に移動するか、透孔を第二段の中央に大きく穿孔することによって解決されるであろう。それにもかかわらず、このような段のプロポーシオンがとられていることには何か原因が有りそうである。それは、第3号墳の円筒埴輪と対比することによって理解されるように思われる。

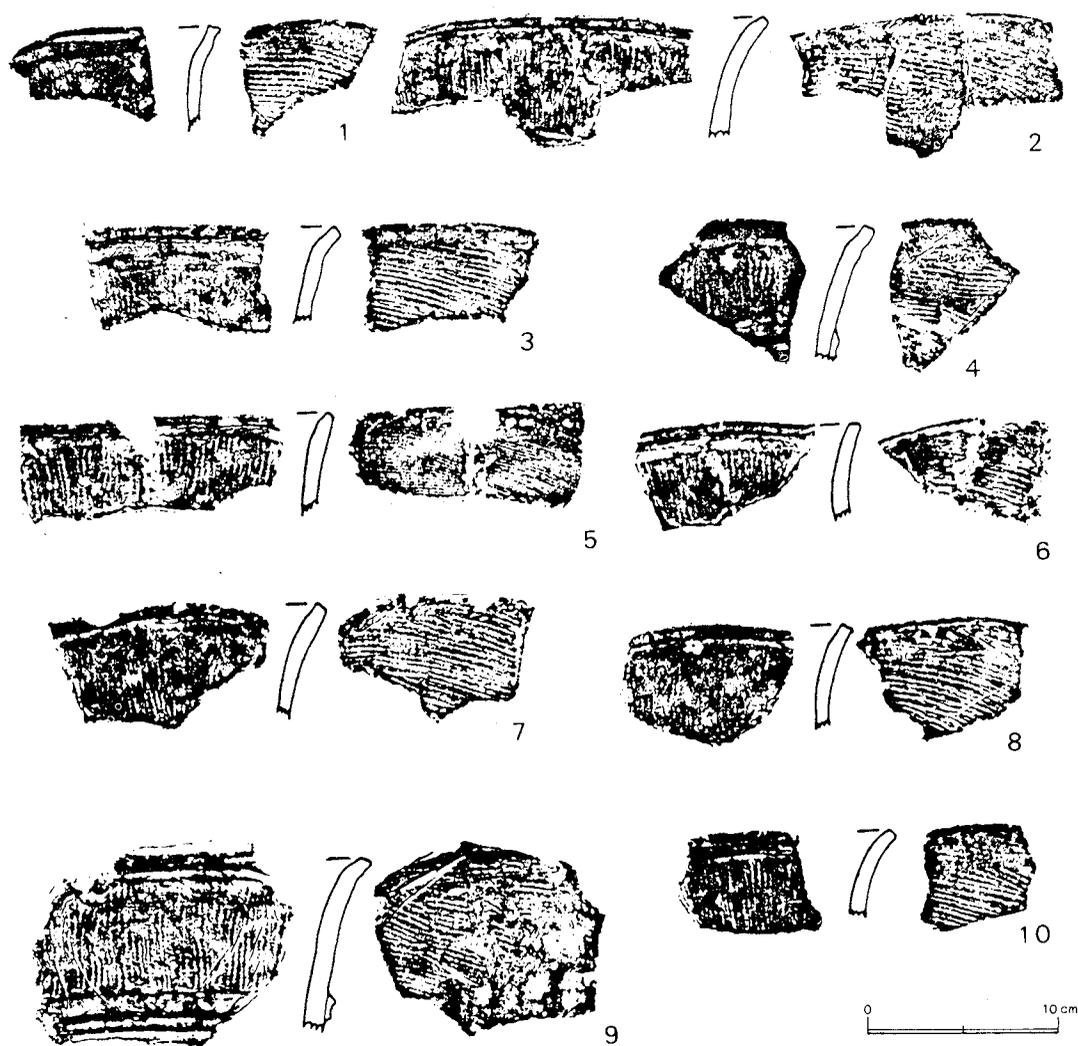


第16図 円山2号墳出土 円筒埴輪実測図

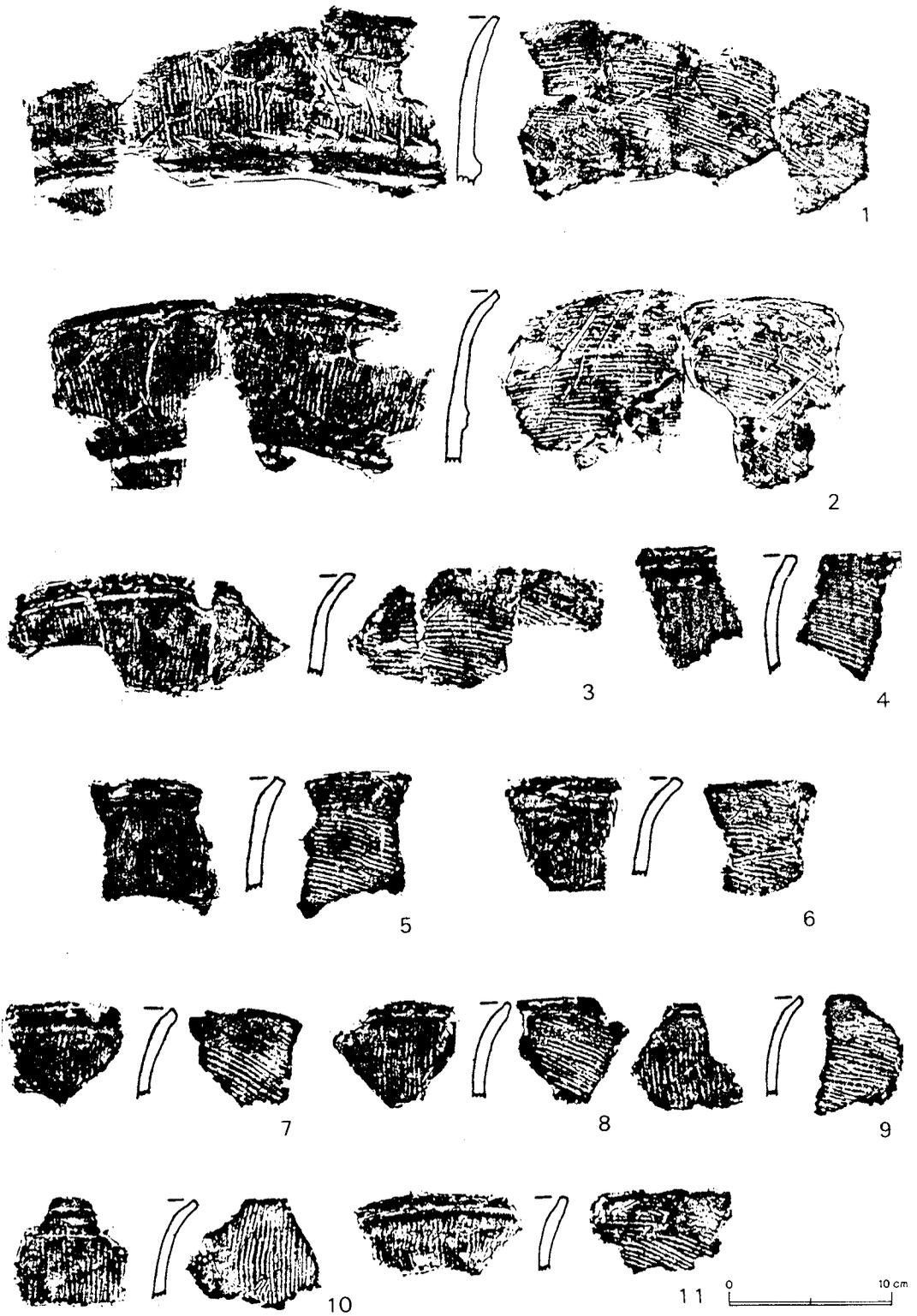
技法や形態の強い共通性が認められる2号墳と3号墳の円筒埴輪は、同一技術水準を保有することからみて、同一工人集団の系譜に属すると判断していいだろう。しかし、第2号墳が第3号墳を避ける目的で周溝を内側に歪めて造営されていることから判断して、両者に若干の時間差が存在することは動かない事実である。そこで、遺物自体の比較から、その変遷を追えるか検証を行ってみたい。まず第1点として、法量の小型化が上げうる。古墳の規模と埴輪の法量及び段構成の間に比例関係のある事はほぼ立証され、大方が認めるところである。しかし、第2号墳の規模は第3号墳を僅かながら上回る規模なのに、これに反して円筒埴輪の法量が大幅に縮小されていることは、円筒埴輪の小型化の現れと判断されよう。第2点として、内面調整の省略化を挙げることができる。ハケメ調整が行われているのは口縁部付近のみに限られ、底部から胴部までは、布状のものを手にあてがって、雑な指ナデ調整が施されているのみである。

以上二点からは、両者間に時間差による変化の一端がうかがえるが、上述の凸帯貼付位置によるプロポーシヨンの問題に立ち返ってみたい。第2号墳の円筒埴輪の第2段が第3段の2倍と長く、穿孔が下半に偏って穿孔された訳は、この円筒埴輪の製作にあたって、第3号墳の円筒埴輪が祖型として意識されていたが、法量の小型化にあわせて、相似形に縮小しようとする、3条の凸帯を貼付した場合、透孔を設ける十分なスペースを失うことになる。そこで第2凸帯を省略することによって、このような段間プロポーシヨンが生まれたと仮定すれば、この間の変化を自然に理解することが可能となるだろう。

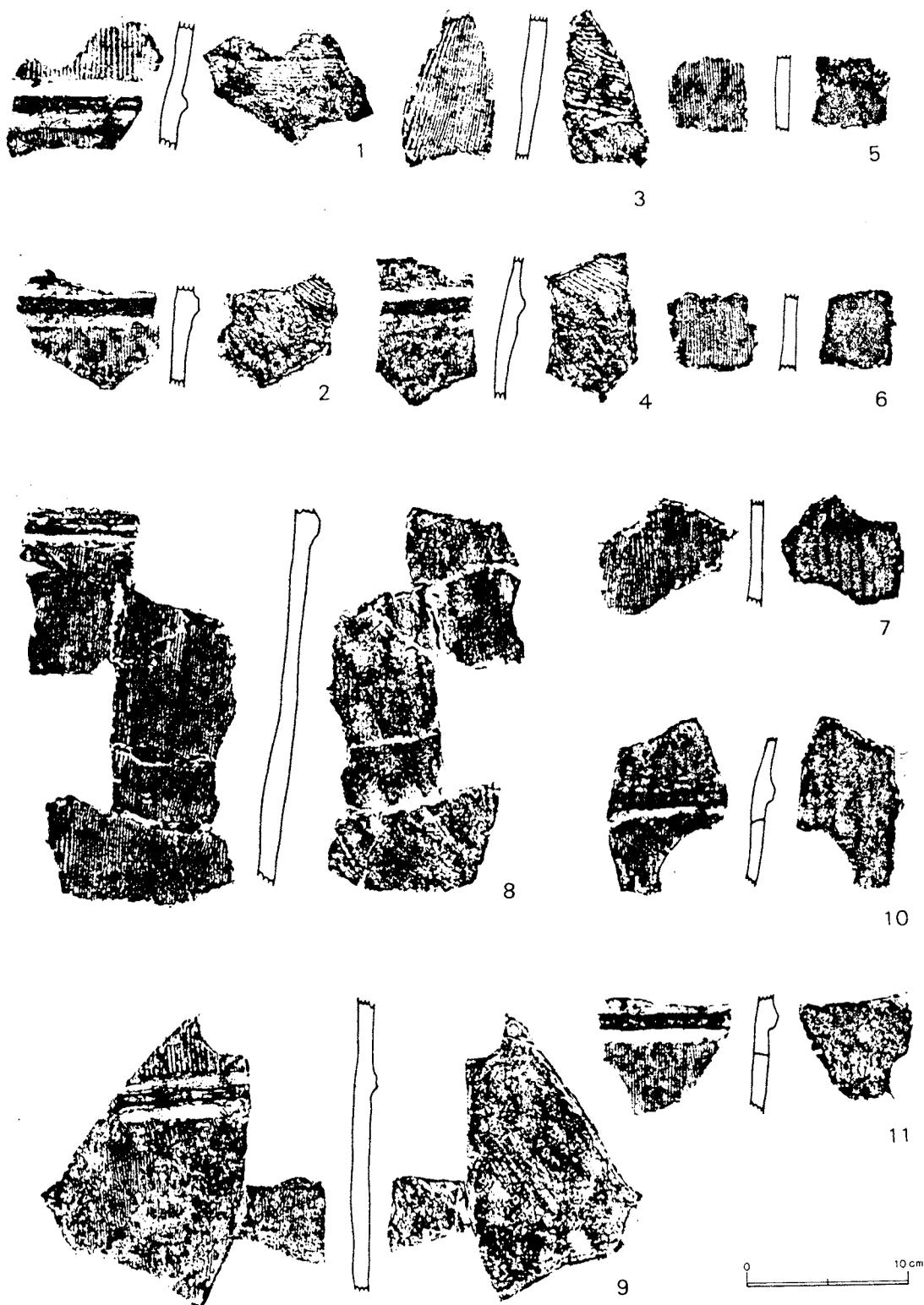
第17・18図は口縁部、第19～21図は胴部破片の拓影図である。ここで注意されるのは凸帯の形状である。第2号墳と共通する断面M字形の凸帯と、断面台形に近く突出の度合いのやや強いもの(第19図-8・10・11、第20図3～5・12、第21図2・5)とが相半して共存している。凸帯を指標にして編年するならば、その突出度の強いものを古くするのが自然であり、今日しばしば、行われているところである。しかし、第2号墳の新しいことが固まっている現在、全体の器形を検討することなく、凸帯のみで編年を行うことの危険性を感じざるをえない。第22図は、底部破片の拓影図である。3と6には3号墳と同様の外面叩きによる底部調整痕が認められる。このことは同一工人手段による特殊技法の伝世を意味するものであろう。底部調整を行っていない1・2・5の内面に残る並行した横方向の凹線は、ハケメ調整痕ではなく、基底部の粘土板を成形した際に付いた作業台の圧痕である。



第17図 円山2号墳出土 円筒埴輪拓影図(1)



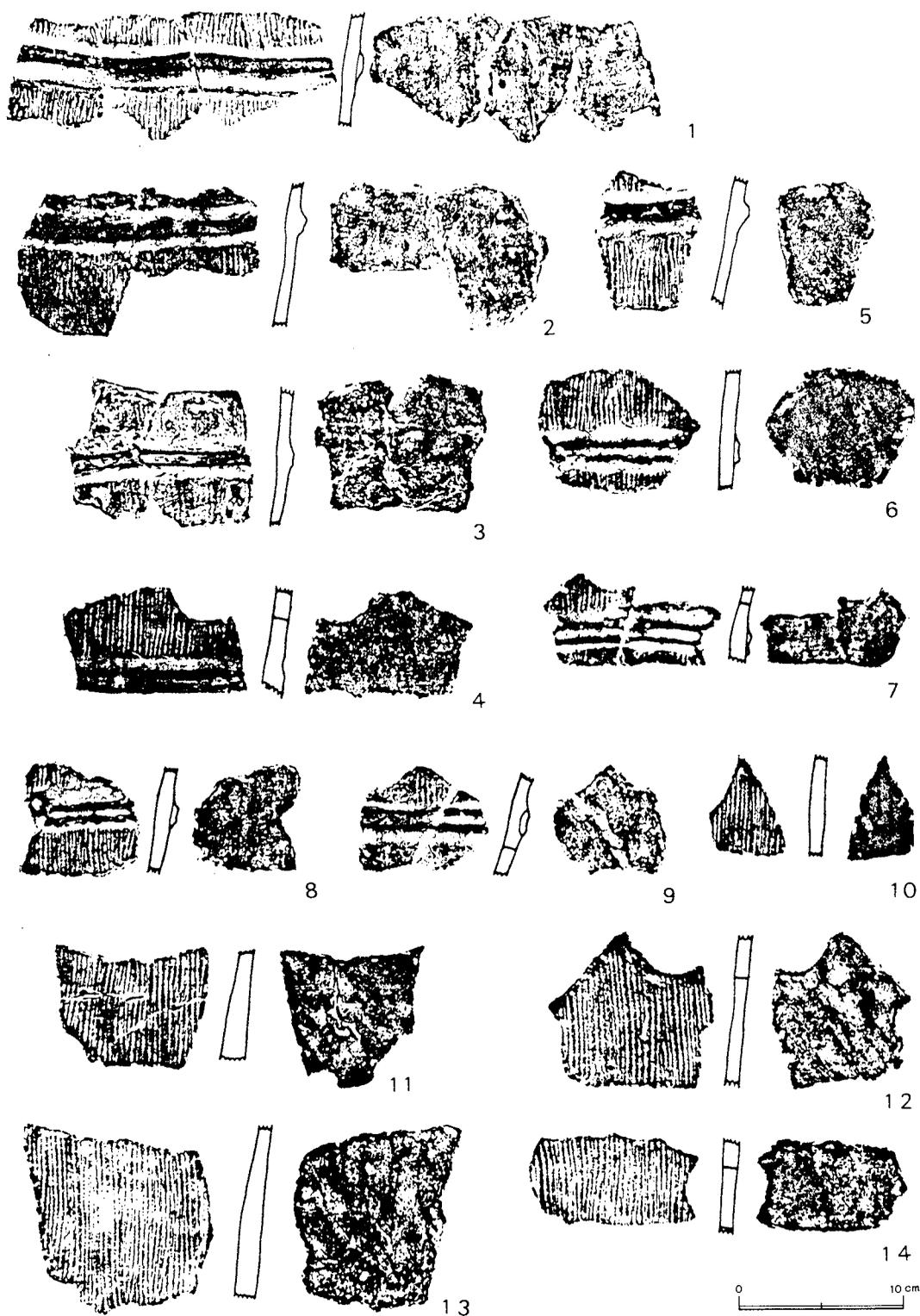
第18图 円山2号墳出土 円筒埴輪拓影图(2)



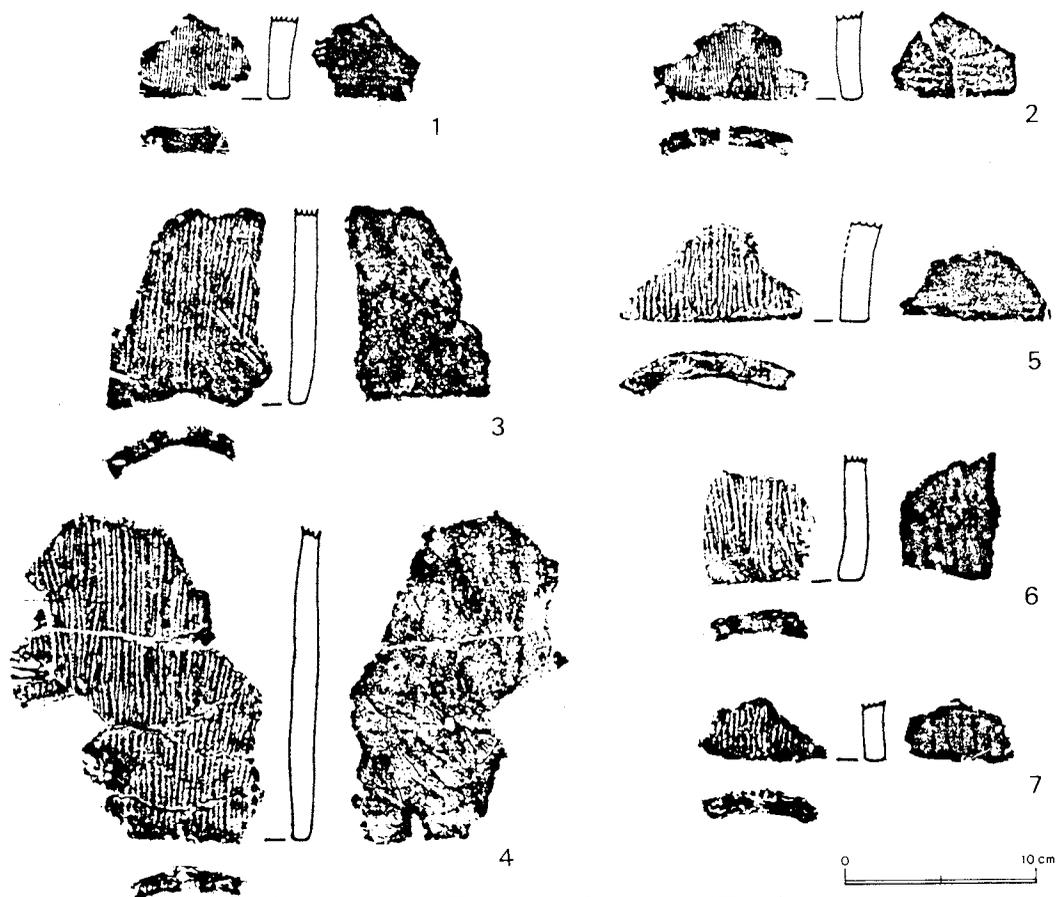
第19图 円山2号墳出土 円筒埴輪拓影図(3)



第20図 円山2号墳出土 円筒埴輪拓影図(4)



第21図 円山2号墳出土 円筒埴輪拓影図 (5)



第22図 円山2号墳出土 円筒埴輪拓影図(6)

3) 1号墳(第23図)

1号墳は遺構の保存状態が悪かったために、出土埴輪の量は僅少であった。小破片のみで、全体の器形をうかがい知ることはできないが、いくつかの特徴をしばり出すことは可能である。

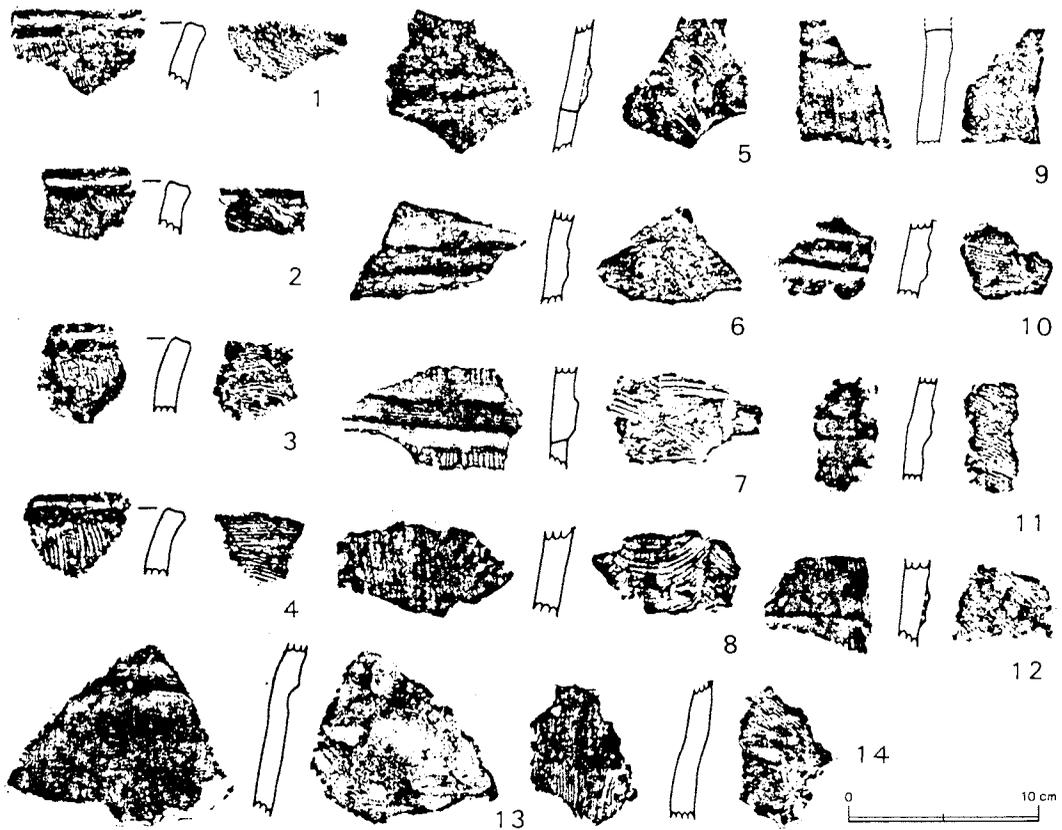
外面調整はタテハケ、内面調整は口縁部ではヨコハケ、底部から胴部では斜ハケが主体的であるが、底部ではナデ調整を行うものがある。凸帯は低平で、断面M字形を呈する。透孔は円形である。以上の特徴は2・3号墳に共通するもので、時間的にも大きな差異は無いものと思われる。

2. 形象埴輪

1) 2号墳の形象埴輪(第24図~29図)

器財形埴輪では、帽子形が2点、靴形が2点、鬘形が2点、盾形が1点出土している。人物埴輪は男女各1体、この他に馬形埴輪の部分破片が出土している。

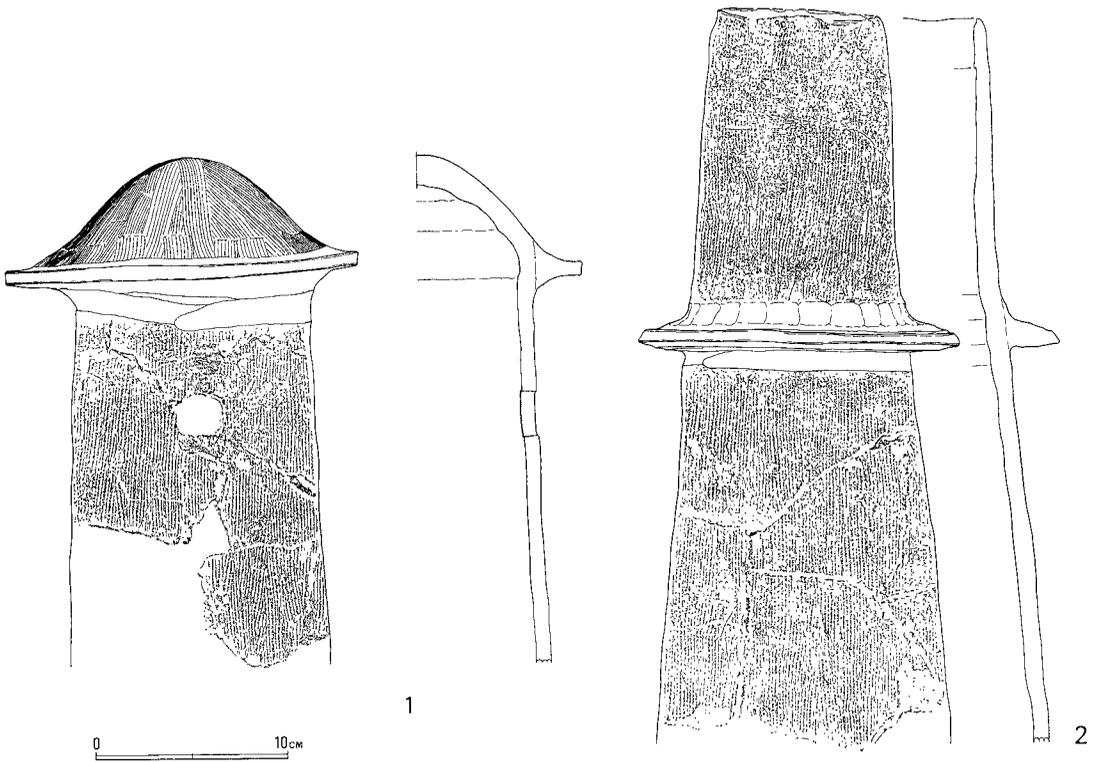
帽子形埴輪A(第24図-1)裾ひろがりの円筒形の台部の上に、半球形で短い庇の付いた陣笠状の帽子を象っている。台部は下半を欠失しており、残存高は20.8cmである。外面はタテハケ調整が



第23図 円山1号墳出土 円筒埴輪拓影図

施され、上寄りの位置に小円孔が穿たれている。本体となる帽子は、円筒と一連に製作され、粘土組巻き上げによって、最終的に頂部を閉じている。底の部分はその後、凸帯状態の粘土紐を一巡させ、ヨコナデ調整を行っている。この底の外縁で測った帽子の直径は18.4cmである。外面は縦位のハケメ調整が丹念に行われている。赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。

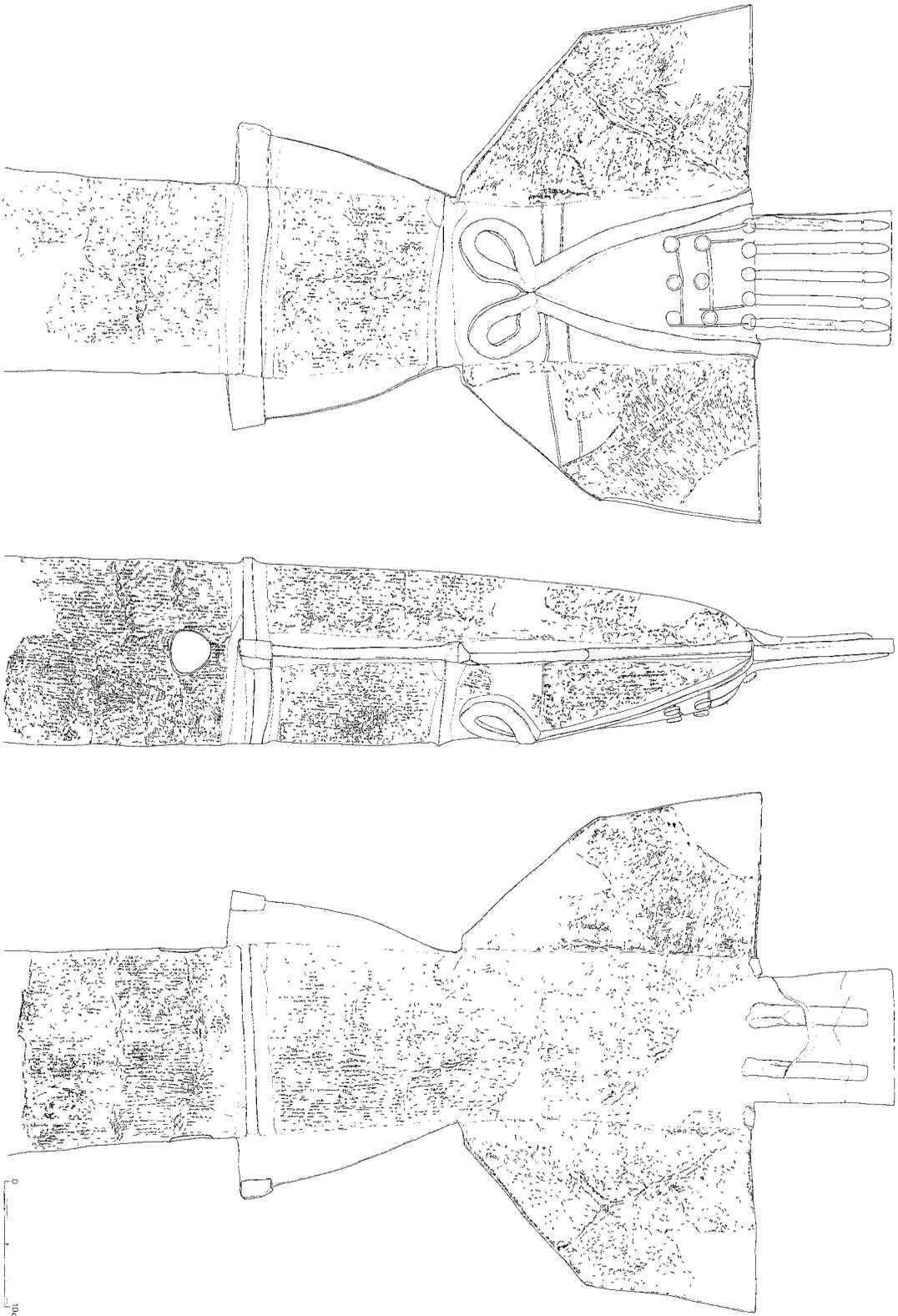
帽子形埴輪B（第24図-2） 円筒形の台部は帽子形埴輪Aと共通の裾ひろがりのものである。やはり下半分を欠失し、残存高は20.8cmである。帽子本体の形状はAと異なり、高い円筒に短い鏝をつけた山高帽形のものである。円筒台部と一連に粘土紐で巻き上げ、外面をタテハケ調整した後に、粘土紐を一巡させて鏝としている。鏝は器面に密着させるために、上下面に指頭押圧が連続的に行われ、さらに下面にはヨコナデ調整が加えられている。帽子本体の高さは17.6cm、鏝での直径は22.0cmである。帽子の天井部は塞がれておらず、筒抜けである。この形状は蓋などの他の器財形埴輪を別体に製作して差し込み式にする場合の台部に外観上は似ている。しかし、上端部が薄手で挿入に耐えるような製作ではない点、挿入の際に生じるであろう擦痕や磨滅の認められない点、および、他にこれと組み合わせるべき器財埴輪の出土をみていない点を総合すると、本品は単独で独立するものと判断される。つまり、天井部の表現を行わないのは、正面観を重視した便宜的省略と考えられよう。



第24図 円山2号墳出土 帽子形埴輪実測図

靱形埴輪A（第25図） 円筒台部の下端と、靱本体上端の鎌身を表現した部分を欠失しているが、主要部分は遺存している。東国に通有な所謂奴舩形の靱を象ったものである。靱本体の矢筒の部分は円筒と一連に中空に製作し、厚みを次第に減じながら上端を塞いでいる。これに対して、鎌身の露出する部分の方形板と、両側の鰭状の部分は粘土板によって形造られている。矢筒部の上端には円形粘土粒の脱落痕が5個所認められ、その下にはヘラ描きによる二重の方形圧画と、円形粘土粒の貼付が行われている。これは、本来、四角い箱状に作られた矢筒の口に金具を鋳留めしている状況を表現したものであろう。矢は粘土紐によって5本が表現されていたものと推定されるが、先端が欠失しているため鎌身の部分は不明である。ただし、本品と対をなす靱形埴輪Bと同一に製作されていた可能性を考えていいかも知れない。矢筒部の上端左右からは粘土紐によって、2本の紐が垂下する状況が表現され、下端で両者が一つに結ばれている。これは靱を背負う際に用いた緒の表現と考えていいだろう。

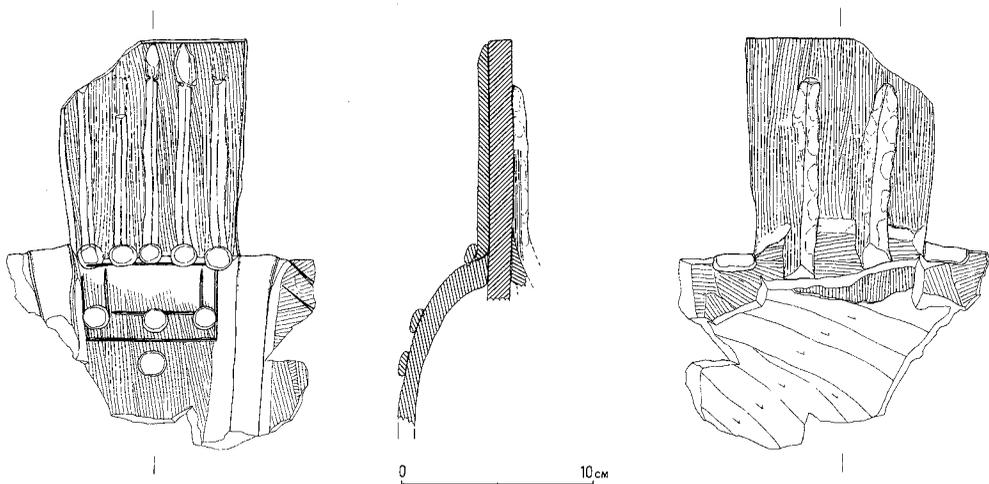
さて、奴舩形の得意な鰭状部分であるが、これは、近年、石見型盾と呼ばれていた埴輪が靱を背負う際の背当て板であろうとする見解が提出され、筆者もこの意見に賛同するものであるから、それに照らしてみれば、この鰭状の形態も背当て板と判断してよいものと考えられる。この形状は、運搬上の便宜のみでなく、恐らく、背後からの攻撃（主に弓による）に備えての防御具としての機能が第一義的なものであったらうと推測される。円筒部の外面調整はタテハケメで上端の左右には小円孔が穿孔されている。本体の矢筒部分はタテハケメ後、粘土紐が貼付され、ナデ調整を行って



第25图 円山2号墳出土 轂形埴輪実測图(1)

いる。鱗状部は主に斜ハケが用いられ、最後に並行するヘラ描きの二重沈線によって外下がりの斜位装飾が行われている。背面は装飾は一切行われていないが、矢筒上に突出する方形板を支持するために二条の太い粘土紐が貼付されている。現存高66.6cm、現存部最大幅39.8cmであるが、復原全高は1m近いものと推定される。赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。

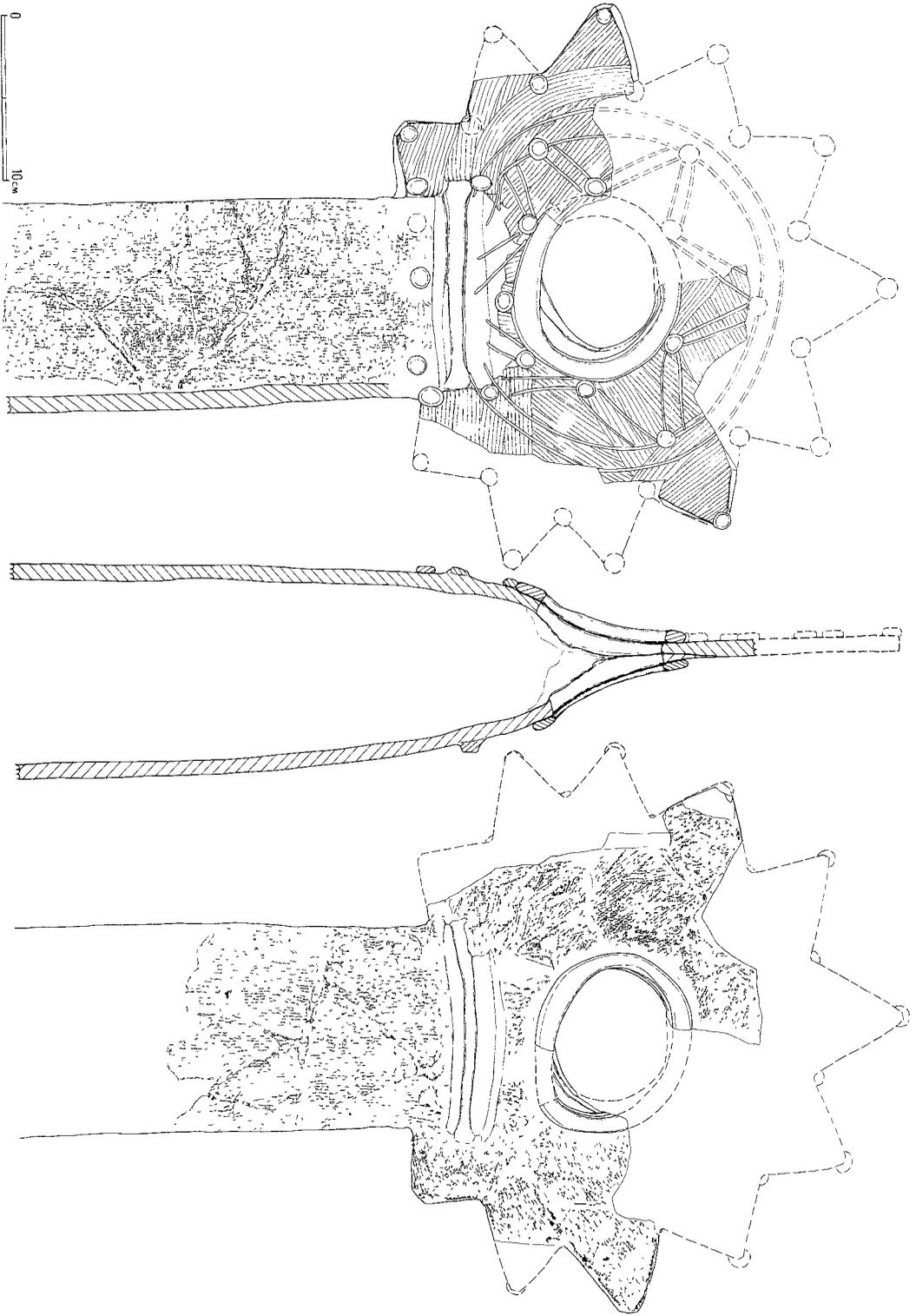
靱形埴輪B（第26図） 靱形埴輪Aと重なった状態で出土しており、対をなすものと考えられる。



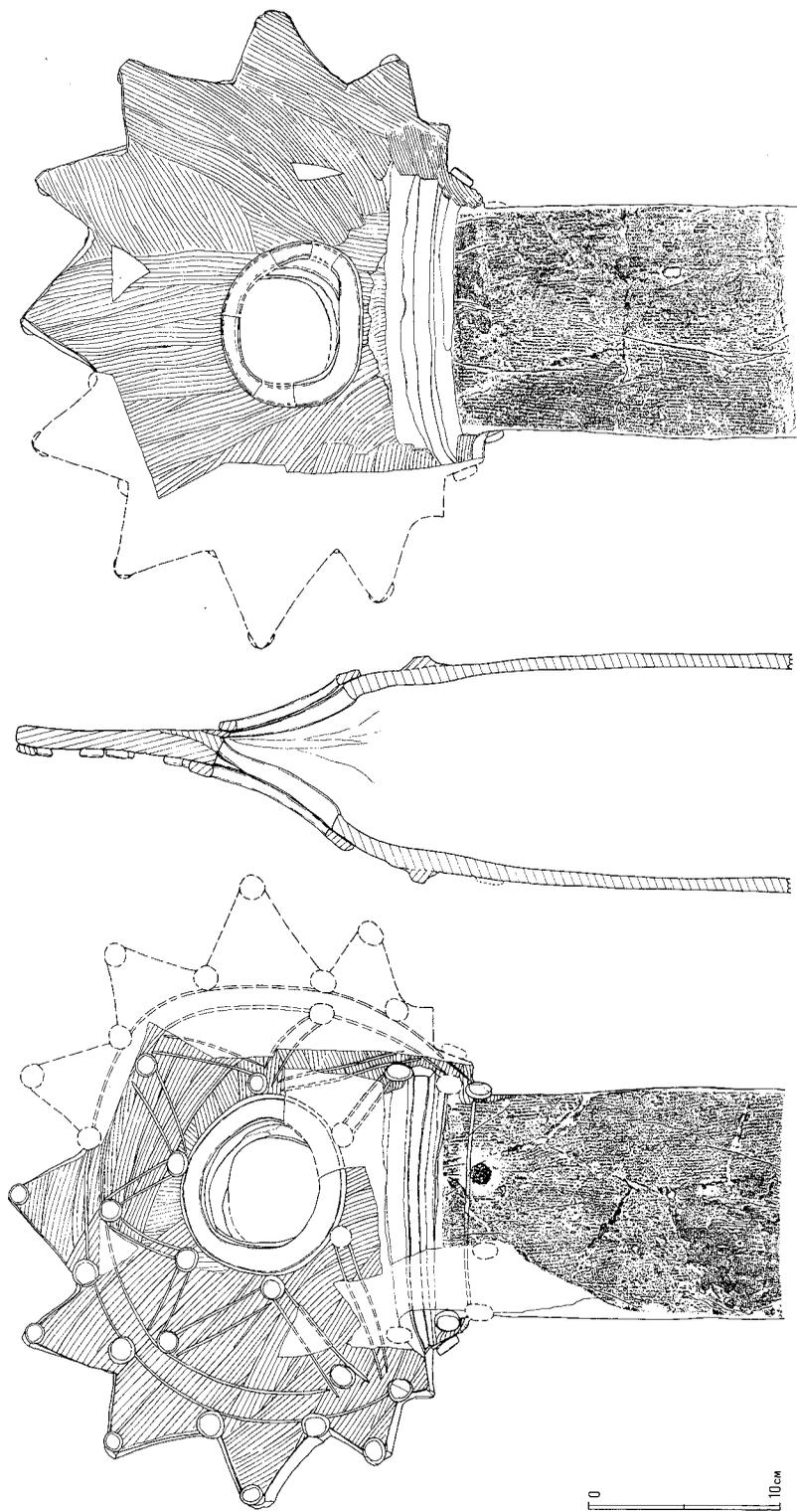
第26図 円山2号墳出土 靱形埴輪実測図(2)

矢筒部分上端から鍔身の露出する方形板までの破片であるが、ほとんどAと同一の表現がなされている。鍔身の部分は粘土紐で造形し、上端を押し潰して鋒部をヘラで切り込みを入れることによって関を表出している。簡略な表現ではあるが、狭鋒の長頸鍔をモデルにしたものと考えられよう。方形板の表裏と矢筒の表面はタテハケ調整、その他の部分はヨコハケ調整が行われている。

翳形埴輪A（第27図） 直径12cm程の円筒によって柄部を表し、その上端に翳の本体を表出している。円筒部を単なる台部でなく柄部と判断する理由は、その上端で翳の下端を挟み込み、蔓金で固定している状況を凸帯をもって表現しているからである。柄部は粘土紐巻き上げ成形後、外面をタテハケで調整している。下半を欠失しており、現存長は29.2cmである。翳本体は中心部が円形に大きく穿孔されており、穴の縁を粘土帯で補強した表現が行われている。その外側にはヘラによって二重の圏線が描かれ、穴縁との間の環状部分を、二重のヘラ描きの連続鋸歯文によって星形に充填している。そして鋸歯文の頂部と谷部には粘土粒の円文が付されている。ただし、下側では割り付けを誤ったのか鋸歯文の完結しない部分があって、円文の位置も乱れている。圏文による内圧の直径は22cmを測る。外圧は、遺存状態が良くないが、外縁を連続鋸歯状に作り、復原では11個の突起をもつものと推定された。内圧と同様に頂部と谷部には粘土粒の円文が付されている。全体のモチーフからすれば、円圏に外接する連続鋸歯文を、二重に重ねている表現ということになる。翳本体の中央部は円筒部の延長上にあるため間隔を減じながら中空に製作されているが、周辺部では一枚の粘土板となっている。外面は斜ハケを傾斜を変えて交互に使用することによって地文的な効果を狙っているように思われる。尚、裏面には穴縁と蔓金の表現が行われているのみで、文様は一切



第27图 冈山2号墳出土 露形埴輪実測图 (1)



第28图 円山2号墳出土 鑿形埴輪実測図(2)

付されていない。このことから、本品には、正面観があり、裏面の省略が行われているものと判断される。本体の最大幅は復原で34.6cmである。

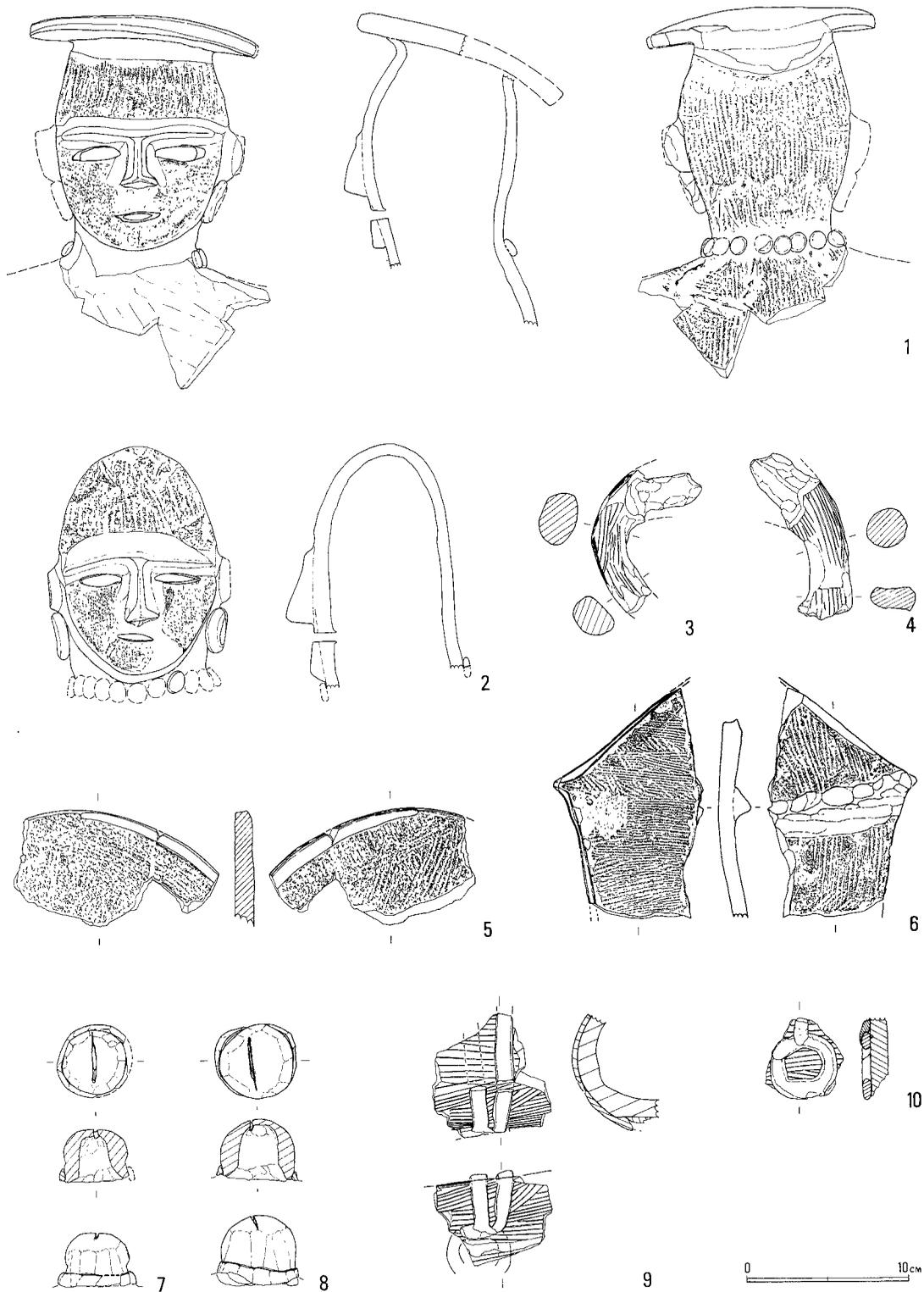
翳形埴輪 B (第28図) Aとほとんど同一の製作で、対をなすものと考えられる。円筒部の下半は欠失しており、現存長は、20.8cmである。円筒に外接する連続鋸歯文を二重に重ねるモチーフは全く同一のものであり、外縁の突起数も11個に復原されAと共通する。ただし、小異を観察していくと、内圧の鋸歯文の内、下に来るべきものが省略されている点と、外縁の突起の内、円筒に接する一番下のもの2個が小さく製作されている点に気づく。また蔓金と思われる凸帯の下に鋸を連打する表現はAと共通するが、本品には直上にヘラ描き沈線が施され、翳の下端の突起の側面にも鋸と思われる円形文が付されている。このことは、柄部への翳本体の固定方法については、Bの方がAより忠実な表現を行っていることになる。

本例では、外面に翳特有の放射状の骨の表現がなく、要所毎に浮文による鋸と思われる表現のあることは、内側に骨を組んで、外面に皮革または布を貼り、これを鋸留めした翳がモデルとして存在していたことを推定させるに足るものであろう。赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。

盾形埴輪 (第29図-6) 円筒の両側に鱗状の粘土板を接着して形造った盾形埴輪の左上隅部の破片と推定される。調整は裏面では粗いタテハケメであるのに対して、表面では斜ハケとヨコハケを交互に繰り返して丁寧に行っていることからみて、地文を表現している可能性が考えられる。ただし、線刻や彩色による施文は行われていない。残存部から全体の形状を復原すると、両側が内彎しながら裾方向へ開き、上下左右に鋭角的な隅を持ち、上縁が円く外彎する最も一般的な形状のものと推察される。裏面には、補強帯として横方向に組紐が雑な指ナデによって貼りつけられている。

人物埴輪頭部 A (第29図-1) 体部の大半を欠失するが、頭部はほぼ完存し、背面の一部も遺存している。頭部は粘土紐巻き上げによって形成され、頂部は分銅形の粘土板(後半部は欠失)で塞いでいる。この髪形がいわゆる潰し島田であることから、女子を象ったものと判断される。顔面には粘土板を貼付、頬から顎の線をシャープに表現している。中央には粘土塊によって鼻筋の通った形のよい鼻を表現し、焼成前の穿孔によって梔子形の大きな目と、小さくおさまった口を形造っている。目の上には粘土紐によって緩く弓状に張る眉の僅かな高まりが表出されている。耳は粘土紐で環状に作られ、その下に接して耳環の表現がある。頸には粘土粒によって丸玉を一連につないだ頸飾の表現がされている。額部が広く、全体としては面長な印象を受ける。頭幅は耳の上で10.8cmで、人物としては小ぶりの部類に属する。頭部外面はタテハケ調整を行い、顔面は横位のハケ調整後、ナデを加えている。内面はユビナデ調整である。体部は外面を任意方向のハケメ調整、内面を指ナデ調整によって仕上げている。赤褐色を呈し、軟質な焼き上がりで、表面にはひび割れと小剥離が生じている。

人物埴輪頭部 B (第29図-2) 頭部のみの出土で、体部を失っている。巻き紐巻き上げによって成形し、頭頂部も完全に塞いでいる。顔面は、Aと同じく、粘土板を貼りたすことによって、頬から顎の線を明瞭に表出している。顔貌については、粘土塊によって象られた筋の通った鼻、刀子穿孔による小さく納まった口、切れ長の大きい目、粘土紐で左右一連に作られた眉の高まりなど、Aとの共通性が強く、同一工人による製作を考えてよいかも知れない。環状に作られた耳の下に接



第29图 円山2号墳出土 形象埴輪実測図

して耳飾を表現する点、丸玉を繋ぐ一連に繋いだ頸飾もAと共通する要素である。全体としての印象も面長である。しかし、頭頂部は頭成りの半球形に製作されている点でAと大きく異なる。この形状は丸帽を着用している状態との理解も有るうけれども、女子で帽子を着用する例は皆無に近いし、美豆良の表現を欠いている点で、通常の男子の場合とも異なっている。やはり、これは坊主頭の男子を表現したものと考えるのが最も自然な解釈であろうと思う。頭部外面は主にタテハケ調整を行っているが、顔面はこれを軽くナデ消している。内面は全て指ナデ調整を行っている。頭幅は耳の直上で10.0cm、顔高は14.3cmである。赤褐色を呈し、堅緻な焼成である。

人物埴輪腕部A（第29図－3） 粘土棒を屈曲させて作った中実の腕である。上端部は本体肩部の穴に差し込むために、指頭で成形したままの状態となっている。外面に露出する部分には、接合の際、粘土を足して補強を行い、ある程度、乾燥した段階で、外面をハケ調整している。掌部を欠失しているため、左右の別は明らかでない。腕の作りの細かさからBと同様の形態をとるものと推定される。赤褐色を呈し、堅緻な焼き上がりである。人物埴輪に伴うものと判断される。

人物埴輪腕部B（第29図－4） Aと同様、中実製作の腕部であり、現存長は10.6cmである。掌部先端を欠いているが、拇指が直角方向に表出されており、左腕であることが判る。体部とのバランスを欠く、短い製作であり、半身像に通有のものと判断していいだろう。赤褐色を呈し、堅緻な焼き上がりであり、Aと対をなす可能性が高い。

馬形埴輪部分破片（第29図－7～10） 7と8は馬鈴を象ったものである。手捏ねによって中空の半球形に作られ、ヘラ切りによって、中央に鈴口を表出している。裾廻りに粘土帯を一巡させており、胸繫か尻繫に装着した鈴を表現したものと推定される。

9は口吻部に近い頭部の破片である。横断面は円筒形であり、外面はハケメ調整が施されている。欠失または剥落した部分が多いものの、素環の鏡板と、これをつなぐ二条の面繫を粘土紐によって表現している状況が判る。

10は輪鐙の部分破片と判断される。9と異なり、断面が平板であることから、障泥上に垂下された輪鐙を粘土紐によって表出したものと考えていいだろう。

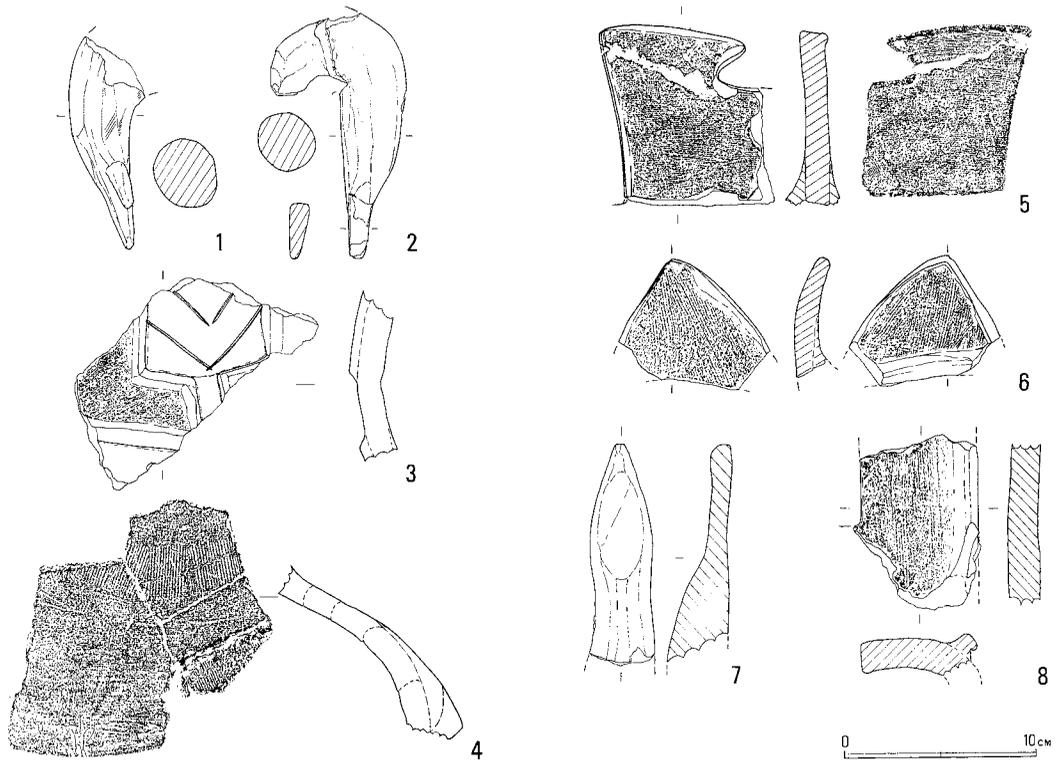
馬形埴輪の部分破片は、赤褐色の色調や堅緻な焼成が共通するものであり、同一個体に属するものと推定される。

2) 3号墳の形象埴輪（第30図）

人物埴輪および馬形埴輪の部分破片と、家形埴輪片が出土している。

人物埴輪腕部A（第30図－1） 根本の部分を欠失している。中実の粘土棒によって製作されており、腕部は断面が円形を呈するが、掌部は偏平に薄く作られている。拇指は独立して表現されるが、四指は一体に作られ、個々の指は表出されていない。外面はハケメ調整後、ナデを加えている。右腕であることが明らかである。

人物埴輪腕部B（第30図－2） 独立して表現された拇指を、接合面で失っているが、全容を知ることのできる資料である。粘土棒を使用して中実に製作されており、腕部は断面円形を呈し、中間での直径3.0cmである。掌部は偏平に作られ、四指の区別は行われていない。根本の部分は本体肩部に差し込むために、指押圧の成形が行われているだけであるが、それに接する部分は本体への



第30図 円山3号墳出土 形象埴輪実測図

接合をはかるために、粘土を補充しており、直径が一廻り太くなっている。外面に露出するこの部分には丁寧なナデ調整が加えられている。全長12.8cmの短い腕であることから、半身像に伴うものと考えて誤りはないだろう。また、直線的に表現されていることから見て、体側に沿って下げた所作を表出した可能性が最も高いだろう。赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。左腕であることが明らかであり、その共通性からみて右腕のAと対をなしているものと推定される。

人物埴輪靴部（第30図-6） 粘土板によって、二辺の外彎する三角形に作られ、先端が上反りになっている。下端部には円筒形の本体から離脱した接合面が認められる。このことから、文人や上級武人として表出される全身像人物埴輪に伴う靴部分と判断される。表裏ともにハケ調整を行った後に、脚部に接合し、その上面には補強を目的に粘土帯を貼付し、ヨコナデ調整を加えている。赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。

人物埴輪腰部（第30図-4） 偏円錐形に作られた腰部の小破片であり、全体はかなり大きなものに復原される。脚部で一旦くびれた後に、大きく外に張り出し、再び内彎しようとするその形態からみれば、裃を誇張して表現する全身像埴輪の腰部と判断され、外面に粘土を足して表現された段は、上着の裾を表出したものと考えられる。内面には、幅2～3cmの粘土紐を巻き上げて成形した状況が、接合痕によって示されている。整形後には雑なナデ調整を行っている。外面はタテハケ調整後、部分的に横ナデ調整を加えている。赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。

馬形埴輪部分破片（第30図-3・5） 3は胸繫または尻繫から垂下された杏葉を表現した破片

と推定される。杏葉は方形の粘土板を貼付し、ヘラ描きの綾杉文を施している。表現に便化が認められるが、恐らく、鐘形の杏葉を象ったものと推察される。赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。

5は立髪の部分破片である。一枚の粘土板によって製作されており、下端には本体への接合面が認められる。先端の切り込み部分は髻（たぶさ）を表現したものだが、立体的に製作されず、もどりの帯の表現が行われていない点は表現上の便化と判断されよう。外面は細かいヨコ方向のハケ調整が行われている。赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。3とは恐らく同一個体と思われる。

家形埴輪（第30図-8） 垂直に立つ壁面の隅部分の破片である。角が丸みをもち、連続していることからみて、粘土紐巻き上げによって成形されたものと判断される。角から6cmの位置には、刀子様の鋭い工具による穿孔で、方形の窓が表現されている。外面をタテハケ調整した後に、隅には垂直に粘土紐を貼り、ナデ調整によって断面方形の凸帯状に整えられている。これが真壁作りの露出した隅柱を示すものかどうかは、壁体の材質が判明しない以上、明らかにすることはできない。赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。

不明埴輪（第30図-7） 粘土棒を使用し、先端を押し潰して、薄く尖らせている。外面にはユビナデ調整が行われている。拇指の表現が無いことからみて、人物の腕と判断することはできない。他に候補を求めるとすれば、矛盾埴輪を挙げることができるが、裏面が扁平である点、縞の表現の無い点からみて、これも蓋然性は薄いように思われる。現存長は11.6cmである。赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。
(若松良一)

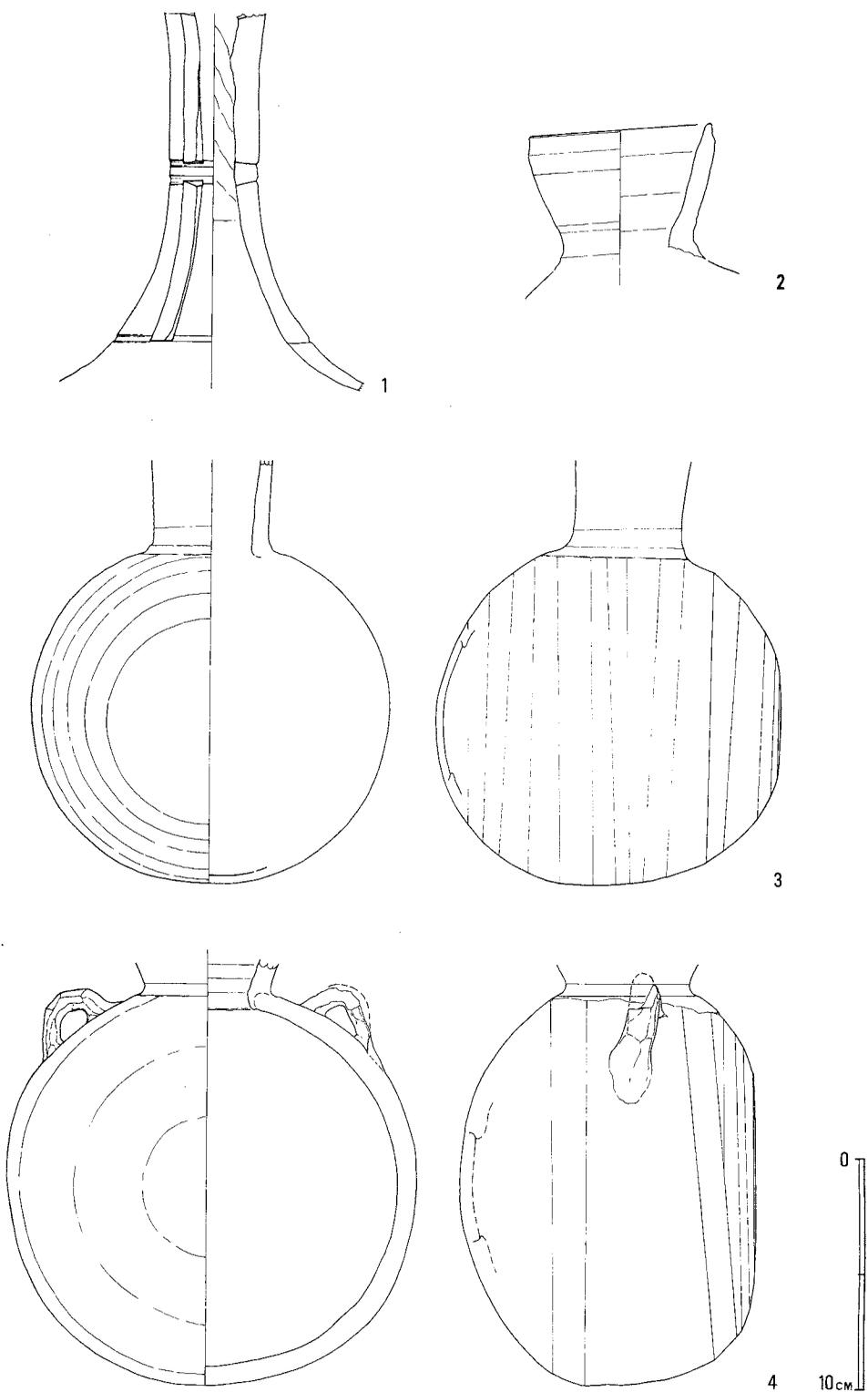
3. 須恵器

2号墳と3号墳の周堀から須恵器が出土している。2号墳出土の須恵器は、高杯・平瓶・長頸壺、3号墳から出土した須恵器は提瓶であった。長頸壺と提瓶は口縁部を欠失していたが、体部はほぼ完全に遺存している。

高杯（第31図-1） 長脚二段透の高杯脚部である。裾端部を欠失しているが、上端には、杯部との接合痕が認められ、脚のほぼ全容が判る。現存高は16.3cmである。長方形の細かい透孔は、中間に巡らされた二条の沈線圧画の上と下とに鋭い工具によって穿孔されている。下の透孔の下端にも一条の沈線が巡っており、これが穿孔の際の割り付け線も兼ねていたものと判断される。実測図は3片の破片から復原されたものであるが、遺存状況からみて、透孔は三方に開くものと推定される。内面の上半はしぼり目が残され、無調整であるが、下半は丁寧にヨコナデ調整が施されている。外面は全面に丁寧な回転ヨコナデ調整が施されている。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

平瓶（第31図-2） 口径8.0cm、現存高5.8cmの口縁部である。器壁は厚く、0.8cmある。直線的に小さく開いた後に、口唇部を内径の斜縁として尖らせている。内外面ともに回転ヨコナデ調整が行われている。頸部は上下をヨコナデで凹めて、断面三角形の凸帯を表出している。器体に対して斜めに取り付けられた平瓶の口縁部と判断していいだろう。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

長頸壺（第31図-3） 所謂フラスコ形の長頸壺である。口縁端部を欠くが、他の部分は完存している。体部は球形を呈しており、直径15.4cmを測る。側面図の右端の平坦な部分が未調整である

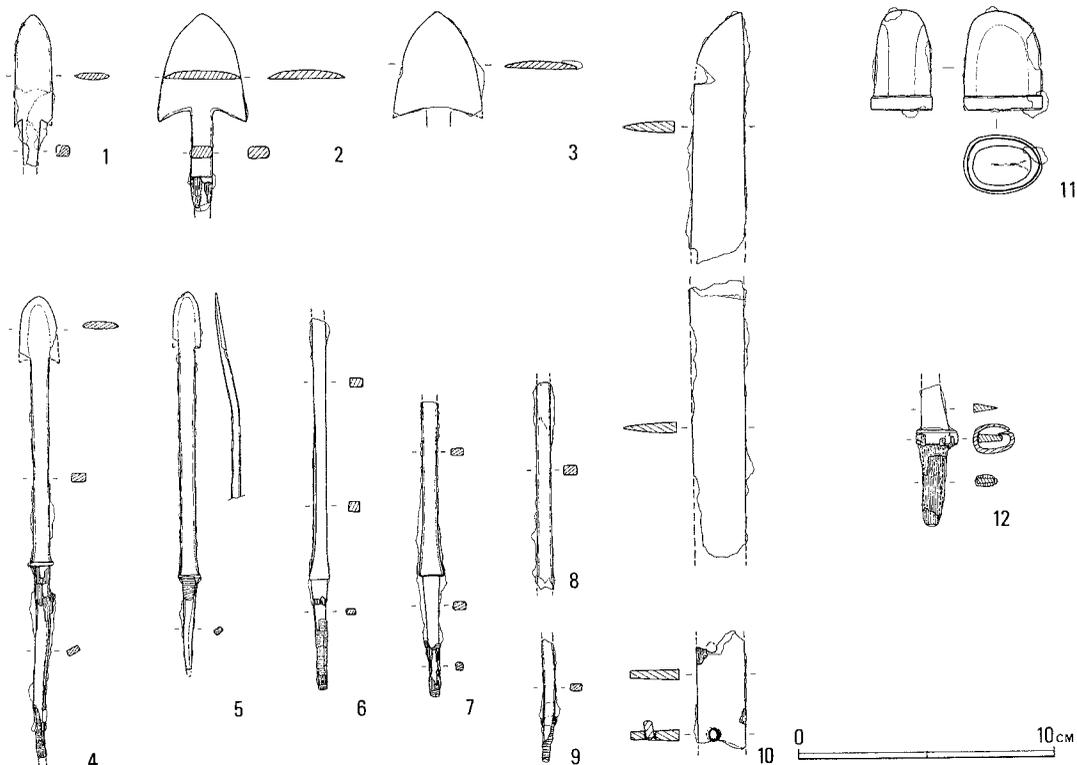


第31图 円山古墳群出土 須恵器実測図

ことから、ロクロに密着していた面と判断される。体部外面には、現状で縦方向のロクロ目が顕著に残されており、調整終了後に横位置にして、体部に行っていることが判る。体部は直径7cmの孔を残して、内面上半の調整を行い、最終的には粘土円盤で、これを塞いでいる。また、底部付近は再調整として、右回転のヘラケズリを加えている。次に前述の様に、横位置に置きかえて、天井部を円く穿孔し、あらかじめ内外面を調整した頸部を、ここに接着している。頸部は直径5.0cm、現存高4.0cmを測るが、現状では直立する円筒状に作られている。胎土は、青灰色を呈し、堅緻な焼き上がりである。2号墳周堀から出土している。

提瓶（第31図-4） 口縁部を欠くが、他はほぼ完存している。体部は偏球形を呈し、直径18.8cm、厚さ12.8cmを測る。側面図右端の平坦な部分をロクロに乗せ、ヨコなで調整を行い、内面調整が全て終了した段階で、直径4.7cmの円孔を粘土板で塞いでいる。底部付近は、ロクロからはずす前に、再調整として、左回転のヘラケズリを加えている。次に、側面にあたる部分に、直径4.0cmの円孔を穿ち、あらかじめ調整を終了した口縁部を接合している。頸部には、この時に、密着を強めるために行われたナデの痕が凹線状に巡っている。肩部には、半環形の鉤が一对、密着されている。尚、頭初の底部はヘラ切り離し後に、ナデ調整が加えられている。胎土は小石粒を含むが、細かく緻密である、還元焰焼成が十分なため、堅緻で均質な焼き上がりとなっており、肩部から上面には自然釉が生じている。色調は灰色から淡青灰色を呈している。3号墳南東側周溝底部近くからの出土である。

鉄器（第32・33図、第2表）

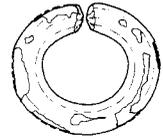


第32図 円山古墳群出土 鉄器実測図

鉄 器

鉄鏃・刀子・柄頭が出土している。すべて第2号墳から出土したものであるが、鉄鏃1を除いて他は主体部礫床上から出土した(1は周堀埋土中)。

形状がほぼ推測できた7点の現状は次のとおりである。



0 5cm

第33図 円山2号墳出土
耳環実測図

第2表 鉄器観察表

No.	種類	形 態	現 状	現存長	備 考
1	鉄鏃	両丸造棘筥被腸扶鑿箭式	身と筥被ぎの一部	6.0	腸扶部分の錆化が著しい
2	鉄鏃	狭鋒片丸造腸扶三角形式	身と筥被ぎ・茎の一部	7.7	
3	鉄鏃	狭鋒片丸造腸扶三角形式	身のみ残存	4.0	
4	鉄鏃	広鋒丸造棘筥被腸三角形式	ほぼ原形をとどめている	18.2	
5	鉄鏃	広鋒丸造棘筥被腸三角形式	酷く弯曲している	15.0	
10	刀子	平棟平造	身の一部	22.1	三個の断片。一片には目釘孔がある
11	柄頭			4.1	
12	刀子		身と茎の接合部断片	5.7	
33図	耳環	銅芯金箔	長径3.9mm×短径3.4mm		断面やや扁平

4. その他の遺物 (第34図)

土 器

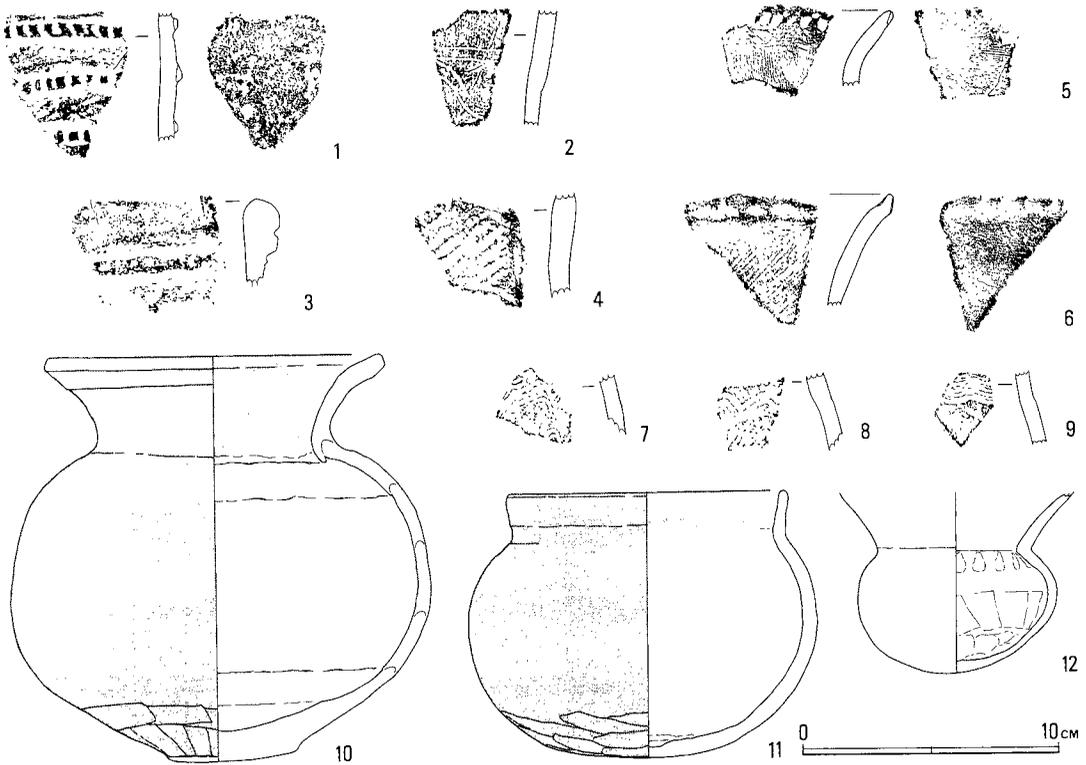
古墳に伴う遺物以外に、縄文式土器、弥生式土器、古式土師器が出土している。

1と2は縄文時代前期の諸磯B式土器の深鉢破片である。1は粘土帯を等間隔に貼付し、半截竹管による刺突を加えている。2は半截竹管で三角形文、複数波状文を描いている。

3と4は縄文時代中期の加曾利E式深鉢の破片である。3は肥厚させた口縁部直下に2条の沈線が認められる。4は胴部破片で単節RLの縄文が施文されている。

5～9は弥生時代後期の岩鼻式土器の破片である。5と6は外反して開く甕の口縁部で、内側面ともハケ調整が行われている。口唇部は指頭押圧を等間隔に加えて、波状に作られている。7～9は胴部上半の破片で、やや乱れ気味の櫛描波状文が施紋されている。

10～12は古墳時代中期の和泉式土器である。10は口径13.4cm、器高16.1cmを測る壺形土器で口縁部内面と外面が赤色塗彩されている。11は口径11.1cm、器高10.5cmを測る単頸壺で、底部外面をヘラケズリ後、口縁部内面と外面に赤色塗彩を施し、ヘラミガキを加えている。12は胴部径7.8cmを測る埴形土器である。薄手の製作で、内面にはヘラケズリが認められるが、外面調整は肌が荒れていて不明である。10・11は2号墳墳丘下、12は2号墳の北西側周堀からの出土である。



第34図 円山古墳群出土 土器実測図

5. 主体部

円山古墳群の三基の古墳の主体部は、何れも完全に破壊されて、形状が確認出来たものは皆無であった。只、2号墳の主体部が僅かに礫床の一部と玄室入り口付近の側壁が遺存していたが、しかし、これも主体部の形状を復原できるほどの状態ではなかったのである。従って、発掘の結果によって、三基の古墳の主体部を推定することはきわめて困難と云わざるを得ないが、2号墳の主体部の推測を基に、敢えてこれを敷衍して解釈すれば、他の二基の古墳の主体部も玄室は狭小で羨道がそれほど発達していない横穴式石室の形状を推定してよいだろう。この種の石室は、この地域では、6世紀後半の小円墳の主体部にしばしば見られる形態と考えられている。

はじめに

古墳時代後期の円筒埴輪は編年が難しいと言われる。それは、川西宏幸氏の研究成果からみても、前期から中期にあたるⅠ期からⅣ期には弥生時代の特殊器台形土器から発展しての円筒埴輪の成立、調整技法及び焼成技法の改良、透孔の形態や配列の統一化など目ざましい変化が、そこに認められるのに対して、第Ⅴ期とされる後期の円筒埴輪には積極的な変化が乏しく、このことに起因するものと言えそうである。つまり、Ⅴ期の主要なメルクマールは、Ⅳ期まで存在した2次調整のB種ヨコハケ技法の喪失と、凸帯の低平化、粗雑化傾向ぐらいであり、全体としては大家形式として評価されるものであって、製作の省力化など、消極的な変化によって特色づけられる段階となっているためである。なかには、底部調整技法の導入という新要素も存在しているが、これは地域選択的であり、全国的な指標とはなりえない。

川西編年第Ⅴ期の実年代は6世紀代とされている。しかし、少なくとも6世紀末までは盛んに円筒埴輪が生産されつづけた関東地方にあっては、100年間を一括することは、埴輪資料のメリットであるタイムスケールを放棄することに近い。

そこで、6世紀代の円筒埴輪の細分と編年を試みる努力が、関東の研究者によって行われている。一つは、岩崎卓也、森田両氏による凸帯に着眼した方法であった。この方法は、大筋としては正鶴を射たものであるが、凸帯突出の低減化という法則性に従うものであるから、明確な画期をもとめることは難しく、一部に編年結果の逆転なども生じている。たとえば、吾妻岩屋古墳の円筒埴輪を古く位置づけざるをえないことや、本報告書に既に触れたように、2・3号墳の円筒埴輪の編年に用いても同様の結果を招く危険性をもっている。このことからみて、凸帯による編年は大局的に正しいとしても、万能でなく、共伴遺物や古墳の構造等々、他の情報と併用しないと過ちを冒す恐れが大きい。

後期円筒埴輪の編年

筆者は、以前から、後期円筒埴輪の編年は器形及び凸帯位置に着目して行うべきことを提唱している。もちろん、凸帯自体の作り方や、調整技法も勘案した上でのことであるが、後期円筒埴輪の変化は上述の2要素に最も端的に表れているとの見通しが得られたからである。

円筒埴輪の器形を比較する際に重要な点は、2条凸帯のものなら、2条凸帯のものと比較することである。こう書くと、当然のことと思われるかもしれないが、多条凸帯の大型円筒埴輪は、最終末までズン胴な円筒状に作られることが通常であり、底部調整技法も原則として採用されない。これに対して、2条凸帯・3条凸帯の小型円筒埴輪は、器形と凸帯位置の変化が大きく、底部調整技法も原則として採用されやすい。本稿では、円山2号墳出土品が2条凸帯、3号墳出土品が3条凸帯なので、2条凸帯と3条凸帯の円筒埴輪に限定して論を進めていこうと思う。

第1段階

B種ヨコハケ調整の行われていた前段階（川西Ⅳ期）の器形を引き継いでおり、ズン胴で、底径

と口径の差が小さい。第1段階の中にあつて底径比の小さいものは、小型信濃例であり、新しい動きとして注目される。凸帯の位置は各段が均等となる位置にあることが原則である。つまり、2条凸帯品の場合、第1段（底部）：第2段：第3段（口縁部）が、ほぼ、1：1：1となっている。3条凸帯の場合も同様である。

口縁部は胴部と同様に直立するものと、上部で小さく外反するものがある。中期の円筒埴輪は板状工具によって横方向に調整する必要上、器をズン胴に作らざるをえず、口縁部も例外ではなかった。だから、口縁部が直立するタイプが古いと言える。口縁部を外反させることは、ヨコハケ調整を失ってから、自由になったと逆言することができ、新しい要素である。

凸帯は大稲荷1号墳のように、幅広でガッシリした矩形凸帯のものは古い要素で、大半は低台形状を呈している。埼玉愛宕塚古墳A類は、第1段階の中でも新しい時期のもので、低いM字状態の凸帯である。透孔は方形・半円形のものが一部に存在するが、円形が主体的である。

全体に淡い色調のものが多く、第3段階に特徴的な濃い赤褐色のものが見られないのは、埴輪製作に用いる粘土が異なっていたことを示しているのだろう。大稲荷1号墳と屋田1号墳の場合、白色に近い発色であり、赤色塗彩を加えている。この点も第1段階の特徴として掲げることができる。

第1段階の実年代は、ほぼ6世紀前葉をあてることのできる。大稲荷1号墳出土の甕、鍔塚古墳出土の器台・高杯が、褐色のTK47型式に近い特徴をもっており、後者では周堀底部直上に榛名山二ツ岳火山灰（FA）の堆積が認められることから、上限を西暦500年位に置くことが可能である。

第2段階

底径と口径の比が大きくなり、やや不安定な器形となる。ズン胴な器形のものは姿を消す。底径と口径の比は1.5倍程度で2倍を越すものはない。凸帯の位置は、各段均等配分原則から崩れ、底部がやや長くなる。口縁部も胴部より長いものが多い。しかし、底部の長さは、中間段の1.5倍程度であり、2倍を越すことはない。

口縁部は直立するものはなくなって、例外なく、外反している。

凸帯は低台形とM字状の低平なものがある。透孔は、半円形のものが一部に残るが、ほぼ円形に統一される。この時期に埼玉県北部（児玉地方）では底部調整技法が導入される。

第2段階の実年代は、ほぼ6世紀中葉をあてることのできるが、第1段階と第3段階の間の過渡期的様相であり、実例数が少ないことから、残存年数はやや短いものと思われる。

第3段階

全体の小型化が進行し、30cm未満の製品も現れる。底部の矮小化も極限となり、底径10cm前後のものが主体的となる。口縁部との比は、ほぼ1：2となり、細身で極めて不安定な器形となる。

凸帯の位置は、2条凸帯品の場合でも、3条凸帯品の場合でも共通して、第1凸帯が器高の丁度真ん中にあることが原則となっている。そして、第2段以上口縁部までの段はほぼ均等となっている。このため、2条凸帯品の場合、第1段（底部）：第2段：第3段（口縁部）が、ほぼ2：1：1になり、3条凸帯品の場合、ほぼ3：1：1：1となる。

凸帯は、ほとんどが低いM字状に作られ、3本の指をあてがって一度に調整する手法が用いられている。透孔は例外なく、円形で、段間がつまった結果、小型化している。この段階で比企地方、

北足立地方で底部調整技法（主に外面叩き、内面ヨコヘラケズリ）が受容され、小型品の大半に用いられるようになる。濃い赤褐色の焼き上がりのものが大半を占める。その原因は出生塚窯の未焼成埴輪で確かめられたように、埴輪製作の材料としてローム土を用いることが始まるためである。

第3段階の実年代は、ほぼ6世紀後葉をあてることができる。桶川市ひさご塚古墳ではTK209型式に近い特徴をもった須恵器が出土している。TK217型式の須恵器を出土した吉見町かぶと塚古墳、東松山市冑塚古墳では既に埴輪を樹立しなくなっている。

円山2・3号墳例は、第3段階の典型とすることができ、編年の位置づけの責を果たしたものと考えている。

最後に、断っておきたいことがある。それは埴輪の地域性の問題である。たとえば、轟俊二郎氏によって下総型と命名された円筒埴輪は、6世紀後半代に当該地方で成行したスタイルで、必ず三条の凸帯をもち、第1凸帯の位置が低いことを約束事としている。このような特殊な様式を備えたものについては、上述の編年案は適用されないことはいうまでもない。第1凸帯の位置が高くなるという一種の法則性が認められるのは、埼玉県・群馬県・東京都・千葉県の一部（上総）であり、この地域が、編年案の適用が可能な地域となる。関東の中では、かなり広範な分布を示す、いわば主流派のスタイルであり、分布の中心地をとって、北関東型と仮称しておきたい。

写真図版



円山古墳群から荒川を望む



古墳群全景



1号墳墳丘



1号墳墳丘全景



1号墳周堀



1号墳周堀



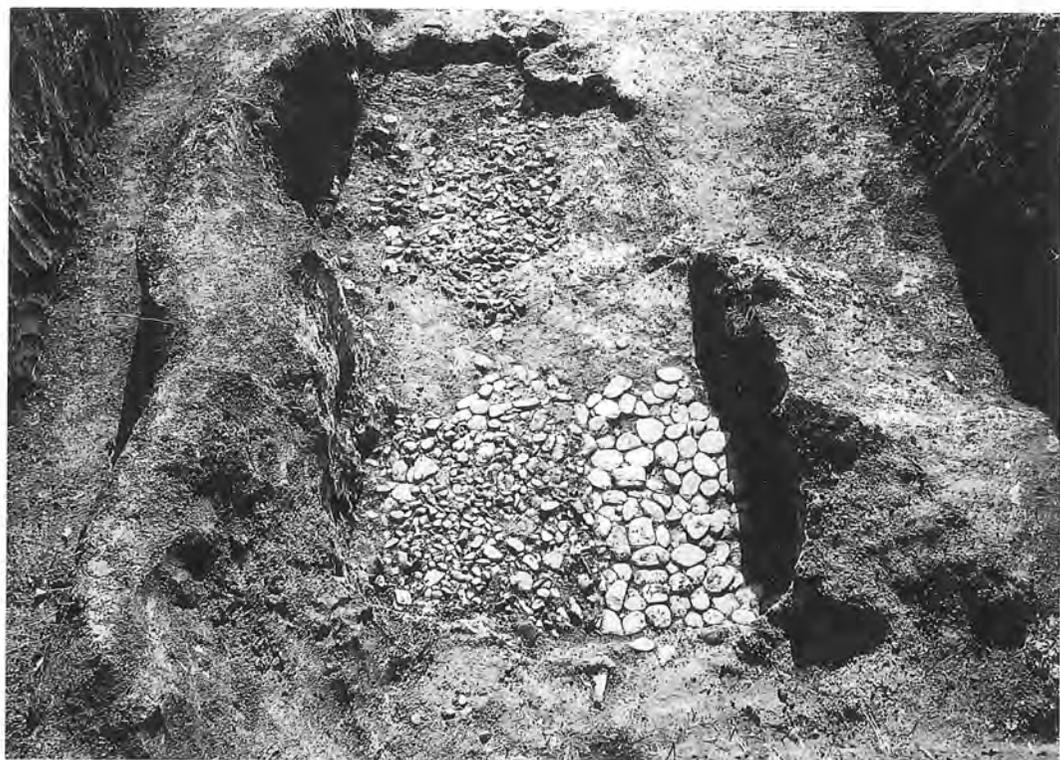
2号墳墳丘全景



2号墳周堀



2号墳石室近景



2号墳石室全景



2号填石室女室入口部



2号填石室床面



2号填周堀



2号填周堀



2号墳埴輪出土状态



2号墳埴輪出土状态



2号墳石室遺物出土状态



2号墳石室遺物出土状态



2号墳遺物出土状態



3号墳墳丘



3号墳墳丘全景



3号墳周堀



2号墳・3号墳周堀



3号墳周堀



3号墳周堀



3号墳遺物出土
状態



2号墳出土遺物



2·3号填出土遺物

大里村文化財調査報告書 第2集

円山古墳群

平成10年3月21日 印刷

平成10年3月21日 発行

発行 大里村教育委員会

印刷 巧和工藝印刷株式会社